会報
特攻
平成26年5月

第100号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073　東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階
電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

能楽堂脇の標準木（ソメイヨシノザクラ）

第35回特攻隊合同慰霊祭

平成26年3月30日（日）11時～12時
於　靖國神社拝殿・本殿

式次第

国歌斉唱　トランペット　堀田　和夫
修祓・献饌
祝詞奏上　理事長　杉山　蕃
祭文奏上　一誠流　吉野　一心
献吟　笛　逢坂　龍信
奉納演奏
世田谷コール・エーデ合唱団
特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団
指揮　大穂　孝子
トランペット　堀田　和夫
「母の手」「我が戦友（とも）よ」
「ふるさと」
全員斉唱　「海ゆかば」
トランペット　堀田　和夫
昇殿参拝　参列者一同
（「国のしずめ」
トランペット　堀田　和夫）

◇　◇　◇

献吟　吟　吉野　一心
笛　逢坂　龍信

第57振武隊　西田　久

昭和20年5月25日沖縄周辺洋上で戦死
たらちねの国をうれうるさくらばな
散りてぞ人に惜しまれにける

回天振武隊　小野　正明

昭和20年5月27日沖縄海域で戦死
日の本（もと）の永遠（とわ）に栄ゆを祈りつつ
黒潮大洋（おおなだ）を指して征くわれ

目次

第35回特攻隊合同慰霊祭　……1
靖國神社の桜―英霊の依代（よりしろ）―
付随筆「さくらいろいろ」……6
総理大臣の靖國神社参拝　……9
第38回・平成26年度都城市
特別攻撃隊戦没者慰霊祭　……13
平成26年度豫科練雄飛会慰霊祭・
招魂観桜祭に参列して　……15
平成26年度豫科練雄雄飛会戦没者
靖國神社慰霊祭に参列して　……15
一期一会　……16
安倍首相の靖國参拝に思う　……19
沖縄戦終結60周年を記念して
アメリカで開催された
シンポシウム……20
託された未来を繋いでいくこと……32
台湾の特攻隊資料館　……34
平成25年度事業報告　……35
平成25年度正味財産増減計算書……37
平成26年度第1回理事会及び
定時評議員会実施報告等　……38
事務局からの報告等　……38

祭　文

本日ここに靖國神社の御社頭に、御来賓の皆様の御臨席と御遺族、戦友、そして関係者の皆様が相集い、第35回特別攻撃隊合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

昨年の慰霊祭より1年、我が国には、若干ではありますが明るい兆しが見え始めました。経済回復の様々な兆候、東京オリンピック・パラリンピック開催の決定、ソチ冬季五輪における若人の活躍、明後日より実施されます消費税増税による国家財政好転への動き等、確かな手応えを感ずるものであります。とは言え、領土問題、歴史認識を巡る周辺国との見解の相違から生ずる国際関係の軋み、遅々として進まぬ東日本大震災や福島第一原発事故による環境汚染等からの復興、少子高齢化に伴う社会保障問題等、英霊の皆様に胸を張って報告できる状態ではないことも事実であります。中でも憂慮すべきは、東日本大震災からの復興と、戦後平和国家として再出発した我が国の領土・領海・領空主権への、周辺国の侵害であります。前者は地震・津波の災害に加えて、原子力発電所の事故による放射線被害をもたらしました。あれから3年の月日が流れましたが、復興は遅々としております。69年前我々が被った国家壊滅の体験、そして零からの出発に、雄々しく立ち上がられた皆様の朋友の方々の凄まじい努力とエネルギーに想いを致す時、忸怩たる思いを禁ずることはできません。北方領土・竹島・尖閣諸島という我が国固有の領土への近隣諸国の態度・対応は、平和国家として再出発した我が国の行き方を踏みにじる行為であります。これに対する我が国の対応は、毅然たる姿勢に乏しく、宥和的態度に終始しております。これは、独立国家として最も重要な民族の誇り、矜持といった観点からは、残念な状況にあります。国のため一身を投げ出された英霊の皆様に申し開きのできる状況なのか、大いに疑問を感じるところであります。

幸い、昨年末、国家安全保障戦略が決定され、基本理念として国際協調に基づく積極的平和主義が明示されました。引き続き、国家安全保障局がスタートし、危機管理体制に一段の前進が見られたことは、評価すべき事として報告申し上げるところであります。

英霊の皆様が、国のため全てを投げ出された戦いが終わり、既に69年の歳月が流れんとしております。思えばこの間、戦争によって疲労し破壊された、文字どおり焦土・極貧の状態から、ここに一部参集しておられます、英霊の皆様の戦友・同期・同輩の方々がその中核となり、見事に奇跡的復興を成し遂げ、世界に誇れる隆盛を我が国にもたらされました。この活動力の根源には、若くして国に一身を奉じた皆様への同期・同輩としての責任感が大きく寄与したことと忖度致すところであります。また、同時に御遺族、戦友の方々が、戦後から現在に至るまで我が国独特の反戦・左翼的症候群とも言える異様な雰囲気がある中、皆様への追悼事業に人生の誠を捧げて来られたことも、忘れることはできません。

世代交代が進み、英霊の皆様が生を共にした方々は、その数を減らしつつありますが、後に続く世代の私どもは、英霊の皆様が辿られた厳しい現実を忘れることなく、己の生き方を自励・振作する起点としなければならないこと、そして、社稷・国の現実が、果たして英霊の皆様に御満足頂けるものなのかという判断基準を大切にすることの二点を中核に、これからも国民的な事業として、この慰霊顕彰を継続発展して参らねばならないと肝に銘ずる次第であります。

今年の冬は厳しく、長く、各地で記録的な豪雪による災害を被りました。しかし、彼岸と共に春の知らせが届いて参りました。ここ靖國神社の桜となってまた会おう、と誓って殉じた皆様方の御心情に改めて思いを致す次第であります。ここに参集した一同、英霊の皆様方に重ねて一層の敬意を表明し、祭文といたします。

平成26年3月30日

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃

◇　◇　◇

3月30日（日）11時より靖國神社において、当顕彰会恒例の第35回特攻隊合同慰霊祭が厳粛に斎行され、御遺族22名を始め来賓、戦友、一般会員等合わせて２００余名が参集して、英霊奉慰の誠を捧げた。

この日、靖國の宮居の桜は、3月25

日の開花宣言（東京の桜の開花宣言は毎年、靖國神社の能楽堂脇にある標準木・ソメイヨシノザクラの老木に数輪の花が開いたのを、気象庁の職員が確認して行われる）から5日を経てほぼ満開となったが、生憎朝から風雨に見舞われた。しかし、悪天候にもかかわらず、靖國の桜を慕ってか、境内は多くの参詣者で溢れ、英霊の遺徳顕彰に相応しい雰囲気を醸し出していた。

また折しも、靖國神社・遊就館1階企画展示室では、一昨年から始められた「大東亜戦争七十年展」シリーズの第3回目として、平成26年遊就館特別展「大東亜戦争七十年展Ⅲ」が開催（平成26年3月15日～12月7日）されている。主として昭和18年9月から翌19年における守勢作戦を主軸とする関係資料が展示されているが、今回の展示対象となる主な項目は、①絶対国防圏策定・大東亜会議・学徒出陣②中部太平洋方面作戦③インパール作戦④一号（大陸打通）作戦⑤比島防衛作戦であり、その趣意書には、「大東亜戦争は、我が国の自存自衛と人種平等による国際秩序の構築を目指すことを目的とした戦いでありました。ひたすら祖国を護るという一年を以て、重大な国土防衛の職責を全うするため、戦場へと赴く先人達の至誠は、ひとえに愛する家族、郷土、そして後に生きる私達子孫のために奮い起こした尊いご事蹟であります。また、当時の真情が籠められた遺書や書簡には、今を生きる私達にも通じる不変の心が示されています。戦時の記憶が希薄になりつつある現代において、実際の戦場に従容と赴かれた先人の声に耳を傾けて頂き、数々のご遺品や史資料に、より深く接することで戦没者を偲びつつ、過去、現在、そして未来を考える機会として是非御覧下さい」とある。

大東亜戦争の原因、目的、戦争の経過、その実相、敗戦の原因等々を知る上で、この企画展は非常に貴重なものである。戦略、戦術双方の指導者の無策、判断の誤りが、あたら多くの純真な若者達の命を奪った。至誠殉国の信念に燃える若者達は、如何なる悪条件の下でも死力を尽くして戦い、散華して逝ったのである。その志の一端を知り、託された未来への遺志を継いで祖国再建に尽くさなければならない、との思いを改めて強く抱くものである。

参集殿では、昨年同様、故松本武仁画伯（陸士61期）の特攻絵画十数点が、同期生・中江仁評議員の指導で展示され、参集した人々の目を惹いた。

合同慰霊祭は、トランペットの伴奏による国歌斉唱に始まり、修祓・献饌・祝詞奏上の神儀に続き、杉山蕃理事長が祭文（別掲）を奏上、「戦後69年の歳月が流れる中で、戦後の我が国の復興と発展を担った先輩方の高齢化とともに、我が国は、相対的に発展の速度を鈍らせ、更にまた、東日本大震災と原発事故による大被害からの復興・再生、加えて周辺諸国からの領土・領海・領空の侵犯などへの対処等大変な難局を迎えつつある。慰霊事業においても、その中核となってこられた戦友世代の喪失という厳しい現実がある。しかし、

参集殿の特攻絵画展示（小方権宮司）

祭文奏上　杉山蕃理事長

献吟　吉野一心・逢坂龍信両氏

献歌　世田谷コールエーデ合唱団・特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団　指揮　大穂孝子氏

慰霊祭場（拝殿）

国家存亡の危機に際し、生命を擲って国に尽くされた英霊の御心情と残された戦友の方々の復興への偉大な努力、営々と続けられた慰霊事業への誠の心を、我々は尊敬の念を持って継承し、後世に伝えていかなければならない。このことこそ我々の務めと心に刻んで努力していく」と誓った。

献吟の声は、朗々として神前に木霊し、惻々として胸に迫る。大穂孝子女史の指揮による世田谷コール・エーデ女性合唱団の献歌「母の手」「ふるさと」、特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団の献歌「我が戦友（とも）よ」、また、強く胸を打つ。最後は、寥々と響くトランペットの伴奏に合わせて、一同「海ゆかば」を唱和する。

「特攻勇士之像」献花式（杉山理事長）

次いで、参列者全員本殿に昇殿し、玉串を奉奠して参拝し、トランペットの演奏「国のしずめ」に合わせて黙祷を捧げ、滞りなく慰霊祭を終えた。

その後、今回初めて遊就館前の「特攻勇士之像」前において、御遺族・来賓・顕彰会代表による献花式が行われ、参列者一同、代表に合わせて、拝礼を行った（「特攻勇士之像」及びその「銘板」に関して、参考までに、会報『特攻』第75号（平成20年5月号）に掲載した記事の一部を、後ろに再録した）。

挨拶　杉山蕃理事長

挨拶・乾杯　宇都隆史参議院議員

◇　◇　◇

第35回特攻隊合同慰霊祭懇親会

平成26年3月30日（日）
12時30分～14時
於「靖國会館」2階「田安の間」・「玉垣の間」

開会の辞（司会）　事務局長　羽渕　徹也
理事長挨拶　理事長　杉山　蕃
会務報告　専務理事　衣笠　陽雄
来賓紹介　事務局長　羽渕　徹也
乾杯　来賓代表　参議院議員　宇都　隆史
懇談会食
全員斉唱「海ゆかば」
トランペット　堀田　和夫
乾杯　来賓代表　大坪　寿光
閉会の辞　専務理事　衣笠　陽雄

◇　◇　◇

慰霊祭終了後、「靖國会館」に移動し、同会館2階の「田安の間」・「玉垣の間」において、懇親会が開催された。

特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団「我が戦友よ」　指揮　大穂孝子氏

懇親会に先立ち、まず杉山理事長が挨拶に立ち、我が国を取り巻く、国内外の厳しい現実の中にあって、我々後輩に当たる世代が、先輩方の遺志を受け継ぎ、日本の復興・再生と慰霊事業への誠の心を継承していかなければならない、と強調するとともに、最近は、戦争を知らない若い世代にも「特攻」に関心を持つ人が多くなりつつある。これらの人々を会員に呼び込んで、特攻の真実を伝え、慰霊・顕彰の輪を拡めていきたい」と訴えた。

次に、平成23年の公益財団法人移行に伴い、定款上総会の規定はなくなったが、この機会に、当慰霊顕彰の運営状況を会員に広く周知し、御支援、御協力をお願いするため、衣笠専務理事から当会の活動現況に関し、平成25年度の事業報告と平成26年度の事業計画、会員の動向等について説明があり、今後ともなお一層、会員の増強、事業

の活性化に努力し、引き続き「特攻勇士之像」の全国護国神社への奉納事業を更に推進させたい、と述べた。

続いて、懇親会に移り、羽渕事務局長から来賓等の紹介がなされた後、来賓を代表して、参議院議員宇都隆史氏が挨拶を兼ねて乾杯の音頭を取られた。宇都参議院議員は、憲法改正問題を含めて、我が国の安全保障と国防の任をしっかりと果たすべく、全力を傾注する」と力強く挨拶をされ、英霊に対し、敬意と感謝を込めて献杯するとともに、慰霊顕彰事業の継続発展と会員の健勝を祈って乾杯の音頭を取られた。

その後和やかな直会の宴は始められたが、途中、慰霊祭でも献歌をした特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団による「我が戦友（とも）よ」と題する出陣学徒戦没者の鎮魂歌の合唱が再び披露されるなどして大いに盛り上がった。この歌の作詞、作曲者は不詳であるが、昭和48年の秋、第14期飛行予備学生を始めとする、五科連合による学徒出陣30周年記念の会合の際、戦没同期生のために歌われたという、戦没戦友を悼む戦友愛の籠もった秀歌であり、一同もこれに和した。

最後は、来賓を代表して、「むらさき会」（陸士56期生会）代表大坪寿光氏の音頭で、乾杯をして会を締め括った。

なお、この懇親会には、慰霊祭の受付業務や案内等のボランティア活動を引き受けてくれた若い有志グループや学生達も参加し、各テーブルでは、特攻について、あるいは日本人の心や教育について語り継ごうとする老兵達の話に熱心に耳を傾けていた。これもまた特筆に値することであった。

（飯田正能記）

靖國神社遊就館前の「特攻勇士之像」を仰ぎ見て

靖國神社遊就館前に南面して建つブロンズ製特攻勇士の像は、その構図といい、その容姿といい、誠に凛々しい若武者振りで、数ある特攻勇士の像の中でも随一の傑作と言えよう。飛行帽を風に靡かせ、大空をきっと見上げて決意の程を眉宇に漲らせ、しっかと大地を踏み締めて立つ。何ものをも怖れず、怯まず、只一筋に征く若き特攻隊員の決意の程を良く表現している。

それもそのはず、この「特攻勇士之像」の制作には、高名な二人の文化勲章受章者が関わっているのである。すなわち、彫刻界の巨匠北村西望先生と日本画の泰斗大山忠作先生である。お二人のうち、北村西望先生については、この「特攻勇士之像」の建立除幕式を伝える会報「特攻」第39号（平成11年5月発行）で触れられており（14頁）、また、その台座の裏の左下に、小さな銅板ではあるが、「原型製作　文化勲章受章　北村西望、拡大監修　日本芸術院会員　北村治禧、拡大制作　石黒光二、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和記念協会、建立　平成十一年三月二十三日」と刻まれた銘板が嵌め込まれているので、御存じの方も多いと思われるが、台座表面の銅板に「特攻勇士之像」と刻まれた銘文の揮号者がどなたであるかについては、触れられていない。御参考までに、当該会報記事を掲載すれば、次のとおりである。

◇　◇　◇

その揮号者は、平成18年の文化勲章受章者大山忠作画伯（特操三期）であり、同画伯は、平成4年に第12代日展理事長に、平成17年には初代日展会長に就任された日本画壇の重鎮であられる。

同画伯が「特攻勇士之像」台座銘板の揮号を引き受けられたについては、次のような経緯がある。

平成11年初め頃、当協会の最上理事長（当時）から靖國神社の大野俊康宮司（当時・第七代宮司）に、台座銘板の揮号依頼を大山画伯に取り次いでもらえないかとの電話があり、大野宮司が早速連絡を取られところ、御多忙中、しかも日時が切迫しているにも拘らず御快諾くださったとのことである。このことを特攻協会の会員が承知されていないのは、残念なことであり、その周知方をお願いしたいとの御懇切なるお手紙が、目下病気療養中の大野元宮司から靖國神社遊就館担当部長宛にあり、当協会へ回付されてきた。それによって明らかになったのが以上のような経緯であり、また、同時に送られてきた『芸術公論』（平成7年9月号）に掲載された大山画伯の紹介記事により、同画伯が特攻隊戦没者や当協会会員等とも深い縁のあったことを知り、改めて同画伯と大野元宮司に深く感謝申し上げる次第である。

（以下省略）

（飯田正能記）

靖國神社の桜
―英霊の依代（よりしろ）―
付随筆「さくらいろいろ」

飯田　正能

靖國神社の桜は、千鳥ヶ淵の桜と共に東京の顔である。その東京の桜の開花宣言は、今年の冬は寒さが厳しく、2月には東京の都心部でも27センチという、ここ数十年来の大雪に2度も見舞われ、関東一帯でも随所で大雪による被害が続出するなどしたため、例年より遅く3月末頃になるとの長期予報であったが、21日の彼岸を過ぎて急に気温が上昇し、摂氏20度近くにもなったせいか、例年よりやや遅い3月25日の午後に行われた。桜の朝寝坊などという諺もあるように、桜の開花は、梅のそれとは違い、寒暖の差が必要である。暖かい日が続いた後に寒風の襲来、そしてまた、温暖といった三寒四温が繰り返された後に一斉に開花するのである。それに反して梅は、風雪に耐え、寒さに堪えて、時節至れば雪の中でも開花する。春告げ花、雪中花とも言われる。梅には、清香芳潤、そして凛々しさがあり、桜には清純華麗、そして潔さがある。いずれも大和心の象徴とされるゆえんである。大方ご存じのとおり、東京の桜の開花宣言は、靖國神社の境内にある3本の標本木（基準木・ソメイヨシノザクラ）に、それぞれ数輪の花が咲くのを観察して、気象庁の係官により発表される。その1本が由緒ある能舞台の脇にある。樹齢六、七十年以上と見受けられるが、ソメイヨシノザクラは、園芸用栽培種で、ヤマザクラとサトザクラの交配種であり、樹命が比較的短いから、かなりの老木であろうか。筆者も幾度かこの能舞台に上がって謡曲・仕舞を奉納したことがあるが、平成11年の春、例大祭に先立って催された奉納謡曲大会に参加させていただき、仕舞「桜川」を演じた時、舞台脇の桜の木から散り残った花びらが、風に舞いながらはらはらと舞台に散りかかり、えも言われぬ感慨に浸りながら舞い納めることができ、終わって、靖國神社の当時の宮司湯浅　貞様から感謝状を贈られ、正しく英霊の御加護と、感激を新たにした経験がある。

大分横道にそれたが、靖國神社の境内には、約８００本の桜の木が植えられている。早咲きの緋寒桜（奄美原産で天然記念物に指定されている）、大島桜、四季桜（冬桜の一種）、山桜、黄桜（ウコン桜）、八重桜（里桜）なども少数本ずつ見受けられるが、大部分はソメイヨシノザクラ（染井吉野桜）である。ソメイヨシノは、江戸時代の末期、現在のＪＲ駒込駅一帯にあった染井村（今も都立染井霊園としてその名を止めている）の植木栽培農家で作られた、山桜のヨシノザクラと里桜のオオシマザクラとの交配種である。

靖國神社の桜には特別の想いと魂が込められている。招魂社時代の明治3年以来、戦友や遺族や崇敬者らの手によって植え継がれ、育て継がれてきたのである。靖國神社の象徴は春の桜と秋の菊である。その御紋章も桜と菊で形作られている。

桜は日本人の心情の花であり、纏綿と想いを懸けてきた伝承の花であるが、古くから御神木として崇められてきた。「古事記」の木花佐久夜毘賣（このはなさくやひめ）の御神木とされたり、吉野山では、修験道の祖役小角（えんのおづぬ）が、金峯山での千日行満願の日に現れ給うた金剛蔵王権現のお姿を自ら桜の木に刻み、堂を建立して祀ったと伝えられるところから蔵王権現の御神木とされ、山岳信仰の象徴となっている。農耕の面においても、古代の人々にとって磐（いわお）や樹木は神の依代（よりしろ）であり、殊に桜は、その開花が農耕生活の一年の豊凶を啓示する神聖な花木であったと考えられる。サは早苗（さなえ）、早乙女（おとめ）など神聖な音であり、クラは神霊の依代（よりしろ）、また、さくら、さかずき、さかな、さらなどすべてさの字の付くものは神々との関わりを持つと考えられる。日本人が花見時になると桜の花の下で杯を交わしたくなるのは、古代からのそうした神事の名残が心の深層にあるからかもしれない。また、仏教の伝来と共に、爛漫と咲く春の桜の景は現世の浄土、観音浄土の荘厳ととらえられるようになったのであろうか。

今年も4月5日（土）の午後、靖國神社外苑参道の大村益次郎銅像前で、「靖國神社の桜の花の下で『同期の桜』を歌う会」が開催された。第30回目である。『同期の桜』の原曲は、西条八十が少女倶楽部に発表した叙情詩「二輪の桜」を原作とし、海軍軍楽隊出身で、名曲「麦と兵隊」を書いた大村能章の作曲により、昭和14年にキングレコードが発表した、樋口静雄の歌う「戦友の唄」で、「君と僕とは二輪の桜」という演歌調の歌謡曲であったものを、昭和17年に、当時海軍兵学校の1号生徒であった海兵71期の帖佐裕（後海軍大尉）が「貴様と俺とは同期の桜」などと歌詞を置き換えて海軍で歌われるようになってから、歌がガラリと変貌して今のような武張った歌になったということであり、戦時中は、多くの特攻隊員を送る別れの宴などで

歌い継がれてきたのである。桜の花の下でこの歌を歌うと思わず感涙に咽ぶのである。「貴様と俺とは同期の桜　離れ離れに散ろうとも　花の都の靖國神社　春の梢に咲いて会おう」と誓い合い、身を擲って祖国の危急を救い、家族を守らんとした英霊の魂はここに宿るのである。

靖國神社の桜は、そうした尊い御霊の依代なのである。そのことに思いを致し、大切に守り育てて、後世に引き継いでいただきたいものである。

（平成26年4月記）

◇　◇　◇

○随筆「さくらいろいろ」

（平成14年4月飯田正能記）

今年、東京の、桜の開花宣言（靖國神社境内の3本の基準木染井吉野桜《ソメイヨシノザクラ＝エドヒガンザクラとオオシマザクラの交配による栽培種で、江戸末期に、駒込の染井村の植木職から広まり、以来全国に広く栽培されるようになった代表的な早咲き種》の開花）は、暖冬のせいか例年より12日も早い3月16日であったが、その季節になると、新聞やテレビなどで桜前線の話題が提供されるようになる。日本道路公団では、昭和61年から全国を縦断する高速道路のサービスエリアに、各地域に適した桜の品種を植栽して桜前線としたとのことである。公団もなかなか粋なことをやったものであり、「現代社会の象徴のような高速道路と自然の共存という新しい状況での桜のあり方として、今後の遺産となると思われる」と、桜博士として名高い京都嵯峨の佐野藤右衛門さんが、その大著『さくら大観』の後書きで言っておられる。

ところで、今年も4月6日（土）の午後、靖國神社外苑参道・大村益次郎銅像前で、恒例の「靖國神社の桜の花の下で『同期の桜』を歌う会」が散り残る桜の下で開催された。今年は第18回目である。『同期の桜』の原曲は、西條八十が少女倶楽部に発表した叙情詩『二輪の桜』を原作とし、海軍軍楽隊出身で、名曲『麦と兵隊』を書いた大村能章の作曲にり、昭和14年にキングレコードが発表した樋口静雄の歌う『戦友の歌』であるという。その歌い出しは、「君と僕とは二輪の桜」という演歌調の歌謡曲であったものを、昭和17年に、当時、海軍兵学校の1号生徒であった海兵71期の帖佐裕（海軍大尉）が「貴様と俺とは同期の桜」などと歌詞を替えて、海軍で歌われるようになってから、歌がガラリと変貌して今のように武張った歌になったということである。桜の花の下でこの歌を歌うと、なぜか目頭が熱くなる。

「散る桜残る桜も散る桜」の句は、良寛禅師の辞世の句と伝えられているが、また、辞世の歌というものに「形見とて何か残さん春は花　山ほととぎす秋はもみじ葉」がある。さらに、歌聖西行法師の辞世の歌とも言われるのは「願わくは花の下にて春死なむ　その如月の望月の頃」であり、しかも西行は、正にその歌のとおり、文治6年（1190年）2月16日、葛城山の西麓、河内の弘川寺において73歳の生涯を閉じ、見事に極楽往生の念願を果たしたのである。西行は俗名を佐藤義清といい、奥州藤原氏の血を引く家系に生まれ、平清盛らと共に鳥羽院の下北面の武士として勤仕し、兵衛尉に任官したが、23歳の若さで出家し、生涯を仏道修行と歌道に努め、安住することなく草庵を転々し、遁世人として過ごしている。仏道修行の厳しさを身をもって経験し、一方では、その修行生活を反映させた多くの秀歌を詠み、多くの歌人と交わり、多くの歌書を著している。そして、西行が足を留めたところには必ず西行庵があり、西行桜を残すのである。誰よりも何よりも桜を愛した西行である。桜を愛し、自然を愛し、自然と一体となる。桜への愛敬が宗教的無常観と結び付いていたのであろうか。

桜は日本人の心情の花であり、纏綿と思いを懸けてきた伝承の花であるが、古くから御神木として崇められてきた。「古事記」の木花佐久夜毘賣の御神木とされたり、修験道の祖役小角が、金峯山での千日行満願の日に現れ給うた金剛蔵王権現のお姿を自ら桜の木に刻み、堂を建立して祀ったと伝えられるところから蔵王権現の御神木とされ、山岳信仰の象徴となっている。農作業の面においても、古代の人々にとって磐や樹木は神の依り代であり、殊に桜はその開花が農耕生活の1年の豊凶を啓示する神聖な花木であったと考えられる。サは早苗、早乙女など神聖な音であり、クラは神霊の依代を表す。また、さくら、さかずき、さかな、さらなど、さの字の付くものは、神との関わりを持つと考えられる。日本人は、花見時になると桜の下で杯を傾けたくなるのは、古来からのそうした神事の名残が心の深層にあるからかもしれない。また、仏教の伝来とともに、爛漫と咲く春の桜の景は、現世の浄土と見、観音浄土の荘厳ととらえられるようになったのである。

ところで、古代の桜は、吉野山に見られるようなヤマザクラが主で、多く

の品種が見られるようになったのは、鎌倉時代以降のことと言われており、政治の中心が近畿圏から関東へ移り、文物の交流が行われる中で、近畿圏に多いヤマザクラと関東地方に自生するオオシマザクラが交配して、多くのサトザクラの異種が生まれたと言われている。特に江戸時代に入ると園芸技術の急速な進展により、園芸専門書や草花図譜も多く著されるようになり、元禄８年（１６９５年）刊行の「花壇地錦抄」には46種の桜が記されており、天保（１８３０～44年）頃刊行の「古今要覧稿」の草木部桜の項には１３４種の絵図が掲載されているとのことである。その後明治、大正、昭和と、戦前までは桜の栽培と改良保存はますます盛んになり、品種も４００種を数えるほどになっていたが、戦中戦後の荒廃とその後の高度成長に伴う無計画な都市化の拡大、河川や道路の改修、拡張、環境の汚染等によって自然破壊が進む中で、かつて街道筋や河川敷に見られた美しい桜並木は大半が姿を消し、現存の桜も余命いくばくもない有様となって、「自然の摂理をゆがめた人間達に、近い未来に迫る危険を、滅びゆく桜の姿が訴えているようにも思われる」と、前掲の佐野藤右衛門さんは嘆いておられる。それでも、桜保存の試みは、少しずつではあるが行われている。その中で最も規模が大きいのは、八王子の高尾にある農水省林野庁・森林総合研究所「多摩森林科学園」のサクラ保存林であろう。全国各地の著名なサクラの品種保存とその美しさを広く伝えることを目的として昭和41年に設置が決まり、それ以来桜の品種収集、苗木作りや造成、植栽を続けて、今では約８ヘクタールの面積に約２５０種、２０００本の桜が植えられている。深く切り込んだ谷々をめぐる多摩丘陵の先端にあって、結構上り下りの勾配が急で、深い谷を望む景観は、吉野山の「上の千本」「奥の千本」辺りを彷彿とさせるものがあり、早咲きの桜、二度咲く桜、一重の桜、八重桜、枝垂れ桜に大輪、小輪、紅色、純白、緑色、黄色、紫色、薄墨色の桜、匂いのある桜等々多種多彩、実に見事な桜の園である。花期も3月中・下旬から5月中旬までと長い。昨年の4月下旬に訪れた折にも、八重咲きの普賢象（淡紅色大輪八重咲き、花の中央の2本の雄蕊の毛が緑色の小さな葉のようになって突出しており、これが普賢菩薩の乗る象の鼻に似ているところからこの名があるとのこと。日が経つにつれて花弁の色が紅色を増す。）や福禄寿、八重紅枝垂れなどが今を盛りと咲き競い、これでも桜かと驚かされる御衣黄や鬱金など黄色や緑色の桜も丁度満開で、真に上求菩提、下化衆生の相を見る思いがしたものである。

桜の木の樹（寿）命は、杉や檜に比べると遥かに短い。栽培種の染井吉野などは六、七十年とも言われている。全国各地にある樹齢何百年という桜の名木は、そのほとんどがヒガンザクラやその変種のシダレザクラ（枝垂桜がしだれるのは、中村輝子日本女子大教授の13年余にわたる研究の結果、ジベレリンという植物ホルモンの欠如によるものということが分かった。ジベレリンは樹木の幹や枝が傾いたときに、重力刺激に反応して、引っ張り成長応力によってこれらを元に戻すための「あて材」という組織を誘導するのだそうで、普通の桜は枝が伸びて重くなると、ジベレリンという枝を強化する物質を分泌するからしだれることはないのだが、突然変異によりその遺伝子を有しない桜は、重力に抗しきれずにしだれるのだそうである。シダレザクラを実生より育てる場合、繰り返し繰り返し支えをしていかないと、一春のうちに数メートルも地面を匍っていくそうである。）あるいはヤマザクラである。日本三大桜として有名な岐阜県本巣の「根尾谷の淡墨桜」は、継体天皇のお手植えと伝えられており、樹齢伝承千４００余年、山梨県武川実相寺の「山高神代桜」は、日本武尊のお手植えと伝えられており、樹齢伝承千８００余年、いずれもヒガンザクラで、福島県三春町の「三春の滝桜」は、樹齢推定７００余年のヒガンザクラ（ベニシダレ）である。これほどの樹齢を誇る桜も、地元の桜を愛する人々の余程手厚い介護がなければ樹命を保つことはできなかったであろう。昔から桜の木は村の繁栄の象徴であり、神宿る木であり、先祖の墓標でもあったのであり、村人がいつも見守り、大切に保護してきたからであろう。今の世の人々も、そのことに思いを至し、大切に守り育てて、後世に引き継いでいただきたいものである。

（平成14年4月記）

緑色のサクラ御衣黄

総理大臣の靖國神社参拝

昨年12月26日、安倍晋三内閣総理大臣は、靖國神社昇殿参拝並びに鎮霊社参拝を行った。この日は、第二次安倍内閣が発足してから丁度1年を経過した日である。11時20分頃官邸を出発した安倍総理は、11時30分に靖國神社に到着、記帳して手水を取り、修祓を受けて先ず、鎮霊社（注記）に参拝し、次いで拝殿から中庭を経由し、本殿に昇って拝礼した。

靖國神社を参拝する安倍総理

第一次安倍内閣において、靖國神社参拝を見送った結果、その後の福田、麻生、鳩山、菅、野田と続く五代の内閣でも靖國参拝を中断するという閉塞事態が到来した。先の小泉純一郎総理が5年間の総理在任中、特攻隊員の遺稿集『あゝ同期の桜』に感銘して、平成13年8月13日から平成18年8月15日までに6回もの参拝を果たしたが、その小泉総理の宿願を実現するため、当時、内閣官房副長官として尽力したのが安倍総理であっただけに、そのことを「痛恨の極み」と嘆じていたが、7年振りに念願を果たし得たのは、総理自身にとっても、国民にとっても「欣快」の一言に尽きる、正に快挙であった。

戦後の総理による靖國神社参拝の足跡は、決して平坦なものではなく、難路の連続であった。

昭和20年12月に、連合国軍総司令部（GHQ）は「国家神道」を廃止することを目的とした「神道指令」を発した。その中でも最も危険視されたのが靖國神社である。日本人の精神的支柱である靖國神社は一時、焼却処分も検討され、その跡にドッグレース場を造る案もあったが、これに猛然と異を唱えたのが、ドイツ・キール出身のカトリック神父で昭和9年以来10年以上日本に滞在し、上智学院学院長なども務め、終戦直後、駐日ローマ法王代表、バチカン公使代理に就任し、連合国軍最高司令官マッカーサー元帥や司令部のブレーンとして相談を受けていたブルーノ・ビッテル神父である。「もしも、靖國神社を焼き払ったとすれば、その行為は、アメリカ軍の歴史にとって不名誉極まる汚点となって残るであろう。歴史はそのような行為を理解しないに違いない。はっきり言って、靖國神社を焼却することは、アメリカ軍の占領政策と相容れない犯罪行為である」「靖國神社が国家神道の中枢で、誤った国家主義の根源であると言うなら、排すべきは国家神道という制度であり、靖國神社ではない。我々は、信仰の自由が完全に認められ、神道・仏教・キリスト教・ユダヤ教など、いかなる宗教を信仰する者であろうとも、国家のために死んだ者は、すべて靖國神社にその霊を祀られるようにすることを、進言するものである」と。ビッテル神父の意見は、マッカーサー元帥に容れられ、即時焼却は撤回されることになった。

一方、「神道指令」によって公務員が公的資格で神社を参拝することが禁じられていた中で、吉田茂総理は平然として伊勢神宮、熱田神宮、明治神宮などの参拝を続けたが、さすがに靖國神社だけは容易に参拝に踏み切ることができず、初めて九段の神域に参入できたのは、対日講和条約締結後の昭和26年10月のことであった。当時の新聞各紙は揃って「公式参拝」と報じている。これを嚆矢として吉田総理は、占領解除後も折に触れて参拝を重ね、以後の総理も病気や短期退陣の場合を除いて参拝を継続した。

ところが、昭和50年に至って三木武夫総理が憲法の政教分離の原則に抵触することを過剰に警戒し、「私的参拝」と称したことから、その後の総理もそれを踏襲せざるを得なくなり、10年もの間、私的参拝の時代が続いた。

この第一のボタンの掛け違いを解消して公式参拝を復活した昭和60年の中曽根康弘総理の参拝も、すぐに頓挫してしまった。中国が靖國神社に「A級

戦犯」が合祀されているという理由で反発したことに屈して参拝を取り止め、以後の総理もこれに倣ったからである。この第二のボタンの掛け違いを克服した小泉総理の参拝の成果を無にして再び参拝を中断し、第三のボタンの掛け違いを招いた責任者である安倍総理が、雌伏7年の後に自らの手でそれを元に戻したのである。これに対して中国と韓国が猛反発したのは予想どおりであるが、米国が公式に批判したのは初めてのことで、政府も若干当惑したかに見える。しかし、総理の靖國神社参拝は、あくまでも国内問題であるとの基本姿勢を毅然として堅持し、今後も正々堂々と参拝を続けるよう心から願うものである。

安倍総理は参拝を終わって、参集殿で記者会見を行い、次のように談話を発表するとともに記者団の質問に答えた。

◇

○安倍首相談話「恒久平和への誓い」

（全文・平成25年12月26日）

本日、靖國神社に参拝し、国のために戦い、尊い命を犠牲にされた御英霊に対して、哀悼の誠を捧げるとともに、尊崇の念を表し、御霊安らかなれとご冥福をお祈りしました。また、戦争で亡くなられ、靖國神社に合祀されない国内、及び諸外国の人々を慰霊する鎮霊社にも、参拝いたしました。

御英霊に対して手を合わせながら、現在、日本が平和であることのありがたさを噛みしめました。

今の日本の平和と繁栄は、今を生きる人だけで成り立っているわけではありません。愛する妻や子供たちの幸せを祈り、育ててくれた父や母を思いながら、戦場に倒れたたくさんの方々、その尊い犠牲の上に、私たちの平和と繁栄があります。

今日は、そのことに改めて思いを致し、心からの敬意と感謝の念を持って、参拝いたしました。

日本は、二度と戦争を起こしてはならない。私は過去への痛切な反省の上に立って、そう考えています。戦争犠牲者の方々の御霊を前に、今後とも不戦の誓いを堅持していく決意を、新たにしてまいりました。

同時に、二度と戦争の惨禍に苦しむことが無い時代を作らなければならない。アジアの友人、世界の友人と共に、世界全体の平和の実現を考える国でありたいと、誓ってまいりました。

日本は、戦後68年間にわたり、自由で民主的な国をつくり、ひたすらに平和の道を邁進してきました。今後もこの姿勢を貫くことに一点の曇りもありません。世界の平和と安定、そして繁栄のために、国際協調の下、今後その責任を果たしてまいります。

靖國神社への参拝については、残念ながら政治問題、外交問題化している現実があります。

靖國参拝については、戦犯を崇拝するものだと批判する人がいますが、私が安倍政権の発足した今日、この日に参拝したのは、御英霊に、政権一年の歩みと、二度と再び戦争の惨禍に人々が苦しむことの無い時代を創るとの決意を、お伝えするためです。

中国、韓国の人々の気持ちを傷つけるつもりは、全くありません。靖國神

歴代首相の靖國神社・参拝記録（戦後、敬称略）

昭和20年	8月18日	東久邇宮稔彦王
昭和20年	10月23日	幣原喜重郎
昭和20年	11月20日	幣原喜重郎
昭和26年	10月18日	吉田　茂
昭和27年	10月17日	吉田　茂
昭和28年	4月23日	吉田　茂
昭和28年	10月24日	吉田　茂
昭和29年	4月25日	吉田　茂
昭和32年	4月2日	岸　信介
昭和33年	10月21日	岸　信介
昭和35年	10月18日	池田　勇人
昭和36年	6月18日	池田　勇人
昭和36年	11月15日	池田　勇人
昭和37年	11月4日	池田　勇人
昭和38年	9月22日	池田　勇人
昭和40年	4月21日	佐藤　栄作
昭和41年	4月21日	佐藤　栄作
昭和42年	4月22日	佐藤　栄作
昭和43年	4月23日	佐藤　栄作
昭和44年	4月22日	佐藤　栄作
昭和44年	10月18日	佐藤　栄作
昭和45年	4月22日	佐藤　栄作
昭和45年	10月17日	佐藤　栄作
昭和46年	4月22日	佐藤　栄作
昭和46年	10月18日	佐藤　栄作
昭和47年	4月22日	佐藤　栄作
昭和47年	7月8日	田中　角栄
昭和47年	10月17日	田中　角栄
昭和48年	4月23日	田中　角栄
昭和48年	10月18日	田中　角栄
昭和49年	4月23日	田中　角栄
昭和49年	10月19日	田中　角栄
昭和50年	4月22日	三木　武夫
昭和50年	8月15日	三木　武夫

昭和51年	10月18日	三木　武夫
昭和52年	4月21日	福田　赳夫
昭和53年	4月21日	福田　赳夫
昭和53年	8月15日	福田　赳夫
昭和53年	10月18日	福田　赳夫
昭和54年	4月21日	大平　正芳
昭和54年	10月18日	大平　正芳
昭和55年	4月21日	大平　正芳
昭和55年	8月15日	鈴木　善幸
昭和55年	10月18日	鈴木　善幸
昭和56年	4月21日	鈴木　善幸
昭和56年	8月15日	鈴木　善幸
昭和56年	10月17日	鈴木　善幸
昭和57年	4月21日	鈴木　善幸
昭和57年	8月15日	鈴木　善幸
昭和57年	10月18日	鈴木　善幸
昭和58年	4月21日	中曽根康弘
昭和58年	8月15日	中曽根康弘
昭和58年	10月18日	中曽根康弘
昭和59年	1月5日	中曽根康弘
昭和59年	4月21日	中曽根康弘
昭和59年	8月15日	中曽根康弘
昭和59年	10月18日	中曽根康弘
昭和60年	1月22日	中曽根康弘
昭和60年	4月22日	中曽根康弘
昭和60年	8月15日	中曽根康弘
平成8年	7月29日	橋本龍太郎
平成13年	8月13日	小泉純一郎
平成14年	4月21日	小泉純一郎
平成15年	1月14日	小泉純一郎
平成16年	1月1日	小泉純一郎
平成17年	10月17日	小泉純一郎
平成18年	8月15日	小泉純一郎
平成25年	12月26日	安倍　晋三

社に参拝した歴代の首相がそうであったように、人格を尊重し、自由と民主主義を守り、中国、韓国に対して敬意を持って友好関係を築いていきたいと願っています。

国民の皆さんのご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

◇

○参拝後の記者団との質疑応答

（全文）

―首相に就任後、初めての靖國神社参拝だが、どのような気持ちで参拝したか。

安倍晋三首相　本日は、靖國神社に参拝をいたしました。日本のために尊い命を犠牲にされた御英霊に対して尊崇の念を表し、そして御霊安らかなれと手を合わせてまいりました。そして同時に、靖國神社の境内にあります鎮霊社にもお参りをしてまいりました。鎮霊社は靖國神社に祀られていない全ての戦場に倒れた人々、日本人だけではなくて諸外国の人々も含めて、全ての戦場で倒れた人々の慰霊のためのお社であります。その鎮霊社にもお参りをいたしまして、全ての戦争において命を落とされた人々のために手を合わせてご冥福をお祈りし、そして二度と再び戦争の惨禍によって人々の苦しむことのない時代をつくる、その決意を込めて不戦の誓いをいたしました。

―今日は安倍政権が発足してちょうど1年になる。なぜ、この日に参拝したのか。

首相　残念ながら、靖國神社参拝自体が政治問題、外交問題化しているわけでありますが、その中において政権が発足して1年、この1年の安倍政権の歩みをご報告し、そして二度と再び戦争の惨禍によって人々が苦しむことのない時代を創るとの誓いを、この決意をお伝えするためにこの日を選びました。

―中国、韓国をはじめ海外からは首相の靖國神社参拝に根強い批判がある。今後どう説明していく考えか。

首相　靖國神社の参拝は、いわゆる「戦犯」を崇拝する行為であると、誤解に基づく批判がありますが、私は1年間の歩みを御英霊に対してご報告をする、そして、二度と戦争の惨禍の中で人々が苦しむことのない時代を創っていくという決意をお伝えするために参拝をいたしました。もとより中国あるいは韓国の人々の気持ちを傷つける、そんな考えは毛頭ございません。それは靖國神社に参拝をしてこられた歴代の総理大臣と全く同じ考えであります。母を残し、愛する妻や子を残し、戦場で散った英霊のご冥福をお祈りし、そしてリーダーとして手を合わせる、このことは世界共通のリーダーの姿勢ではないでしょうか。これ以外のものでは全くないということを、これから理解をしていただくための努力を重ねていきたいと考えています。

また日本は戦後、自由と民主主義を守ってまいりました。そしてその下に平和国家としての歩みをひたすら歩んできた、この基本姿勢は一貫しています。この点については一点の曇りもございません。これからも謙虚に礼儀正しく誠意を持って説明をし、そして対話を求めていきたいと思います。

―中国、韓国のリーダーに直接説明する考えは。

首相　ぜひこの気持ちを直接説明したいと思います。戦後多くの首相が靖國神社に参拝をしています。吉田茂総理もそうでありました。近年では中曽根総理、あるいはその前の大平総理もそうでした。そしてまた橋本総理も小泉総理もそうでしたが、すべての靖國神社に参拝した総理は、中国、韓国と友好関係を更に築いていきたいと、そう願っていました。日中関係は大切な関係であり、この関係を確固たるものにしていくことこそ日本の国益だと、皆さん信念として持っておられた。そのことも含めて説明をさせていただく機会があれば本当にありがたいと思っています。

―今後も定期的に参拝する考えか。

首相　今後のことについて、この場でお話をすることは差し控えさせていただきたいと思います。私は第1次安倍政権の任期中に靖國神社に参拝できなかったことは「痛恨の極みだ」と、このように申し上げてまいりました。それは（自民党）総裁選においても、あるいは衆院選挙の時においても、そう述べてまいりました。その上で私は（自民党）総裁に選出され、そして総理大臣となったわけでございます。私はこれからも私の参拝の意味について理解をしていただくための努力を重ねていきたいと思います。

―靖國神社には多くの「戦犯」が祀られている。戦争指導者の責任をどう思うか。

首相　それは今までも随時、国会で述べてきたとおりであります。我々は過去の反省の上に立って、戦後しっかりと基本的人権を守り、民主主義、自由な日本をつくってまいりました。そして今や、その中において世界の平和に貢献をしているわけでございます。今後も、その歩みにはいささかも変わりがないということは重ねて申し上げておきたいと思います。

◇

○各国の反応

中国、韓国は強く非難。米国国務省のサキ報道官は12月26日、「日本は大切な同盟国だが、日本の指導者が近隣諸国との緊張を悪化させるような行動を取ったことに米国政府は失望している」との談話を発表した。

○世論調査

共同通信社の全国緊急電話世論調査（昨年12月28、29日）では、首相の参拝について「よかった」が43・2％、「よくなかった」が47・1％。

読売新聞の調査（1月10～12日）では、内閣支持率は62％で、前回の調査（昨年12月6～8日）の55％から7％増えた。

○「新たな追悼施設」には否定的見解

安倍首相は、一部で出ている「靖國神社に代わる新たな追悼施設」については否定的な考えを示している。

◇

（注記）

○鎮霊社例祭（諸霊祭）

靖國神社の拝殿から本殿へ向かう左側の回廊の中程に出入り口の扉があってその外側の旧招魂斎庭に二つの小社がある。向かって右の小社を「元宮」といい、左の小社は「鎮霊社」という。この二社とも大樹の下にひっそりと建っており、よく似た造りの小社であるが、「元宮」は瓦葺きで、「鎮霊社」は銅板葺きである。この旧招魂斎庭に入るには、通常、拝殿の左、回廊に連なる玉垣の奥の門からであるが、門扉が開けられているのは午前9時から午後4時までである。

「元宮」は文久2（1862）年、津和野藩士出身で、平田篤胤派の国学者として尊攘志士と共に王政復古に活躍した福羽美静（1831年～1907年、維新後、藩主亀井茲監が神祇官副知事に就任すると、福羽も神祇関係の要職を歴任、1869年明治天皇の侍講となる）が中心となり、初めて徳川齊昭卿ら維新の志士46人の霊を慰めるため、京都の邸内に密かに祠堂を建てて祀った。奠都に伴い東京に移されたが、招魂社の先駆けとも言うべき由緒ある祠堂で、昭和6年、福羽家より神社に奉納され、「元宮」と称して今日に至っているが、例祭日は4月1日である。

鎮霊社

一方、左の小社「鎮霊社」は、「明治維新以来の戦争・事変に起因して死没し、靖國神社に合祀されぬ人々の霊を慰める為、昭和四十年七月に建立し萬邦諸国の戦没者も共に鎮齋」されており、例祭日は7月13日である。この「鎮霊社」は、靖國神社の第5代宮司を務められた（昭和21年1月から昭和53年3月死去までの32年間）筑波藤麿氏が、前年の宗教者国際会議に出席し、ヨーロッパ諸国を訪問して帰国された後、各国とも先の大戦で、国際条約無視の無差別爆撃や人種的迫害等により数百万にも上る非戦闘員の犠牲者の霊を弔う祭祀が行われている現状に鑑み、我が国でもそのような祭祀を行う必要性を痛感され、先の大戦での原爆や空襲による死没者を始め、前記のように明治維新以来の戦争・事変により死没し、靖國神社に合祀されない犠牲者、更には我が国民のみならず、万国の戦争犠牲者の霊を弔い、世界の平和を祈願するため、建立されたのが、この「鎮霊社」であり、靖國神社では「元宮」と共に毎日、神官による祭祀が行われており、その例祭が、趣旨を同じくする「みたままつり」の前夜祭の後の宵祭りとして毎年7月13日の午後8時過ぎに行われている。

それより先、靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することになった、とのことであり、「鎮霊社」建立以後は、前記のように同社例祭として齋行されている。

大樹の下、昼なお暗い霊域において、御社の二つの燈明が幽かに揺らぐのみの、暗闇に包まれ、静寂にして幽玄の気に満ちた中での神儀で、篳篥の音と共に、白装束の神官6名によって奉仕され、修祓、降神、献饌、祝詞奏上等が斎行される。参列者は、宮司以下遺族代表他十数名に過ぎない。

（陸士61期　飯田正能記）

第38回・平成26年度 都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭

理事　水町　博勝

平成26年4月6日、宮崎県都城市都島公園（旧陸軍墓地）内の「都城特攻振武隊はやて慰霊碑」前において、都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会の主催により、平成26年度「都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭」が執り行われ、当顕彰会を代表して参列させていただいた。

この慰霊祭は、第一特別振武隊第一陣の四式戦（疾風）隊が出撃した日である昭和20年4月6日に合わせ、毎年この日に執り行われているものであり、今年は第38回目になる。

この日南九州の都城では、桜も既に散り、晴天ではあったが、春とはいえ肌寒く、寒風の吹き荒ぶ中での慰霊祭となった。参列者は、御遺族、来賓、一般参列者を含めて約300名であった。

慰霊祭は10時半に開式、全員黙祷の後、都城市の市長でもある特別攻撃隊戦没者奉賛会池田宜久会長が祭文を奏上し、戦後69年となるが、都城から出撃した特攻隊と直掩隊の戦没者のことを想えば、痛恨の極みである。戦争の記憶を後世に伝えるために、今年は地元の中学生にも参列してもらったと就任1年目の抱負を交えて述べられた。

追悼の辞は、福岡県偕行会会長菅原道之氏が、陸士57期生代表として捧げられたが、ミッドウェー海戦の敗北から沖縄作戦へと戦局不利の中、軍は特攻作戦のため、国内や満洲等から特攻戦力を集めたが、その特攻隊長には、同期の57期生が多く充てられた。日本を護るために、身を捨てて戦ったことに感謝するとともに、このような慰霊祭を執り行っていただく都城市に心から感謝したい旨を述べられた。

献茶及び参列者全員による献花が行われ、来賓を代表して、参議院議員・前市長の長嶺誠氏が挨拶をされ、『永遠の0』などによって、戦中戦後の苦労は皆さんご承知のとおりであるが、戦没者の慰霊と平和への努力は永遠に続けていかなければならないと述べられた。

献詠は、「弔　特攻勇士」「戦没者追悼の詞」が吟詠され、献歌は、陸士57期生による「陸軍士官学校校歌」が、少飛会会員も加わっての「加藤隼戦闘隊」「同期の桜」「海行かば」が歌われた。

平和へのメッセージは、都城市立祝吉中学校生徒代表の黒木さんが、戦争を考えること、平和を考えること、そしてそれを語り継ぎ、永遠の平和を目指すことを誓った。

陸上自衛隊第43普通科連隊の音楽隊による音楽隊演奏の後、遺族代表として、第59振武隊大竹少尉の甥の大竹氏（岡山県）が、戦後生まれで伯父の様子は知らなかったが、当時世話になった方を訪ねて、当時の様子を聞かされたと話された。

慰霊祭は、12時に閉式となり、1時間半に及んだ厳粛な慰霊祭であった。

6年前の、平成20年度の都城慰霊祭にも当顕彰会を代表して参列し、今回が2回目であったが、印象に残ったことは、参列者が、100名ほど減少したことで、それは関係者（御遺族・戦友）の高齢化によるもので、いずこの慰霊祭にも共通する現象であり、慰霊祭を企画・運営される担当者の苦労されるところであろうと思われる。本慰霊祭に、地元中学生が参列したことによっても、そのことが伺える。

知覧や万世の特攻平和祈念館のような、特攻隊員や特攻基地及びその周辺に関する記録等を集めた所が、当地にもないかと、慰霊祭の前日に都城歴史資料館を訪ねたところ、同資料館には、古墳時代の出土品から一昔前の生活用品と共に、四式戦「疾風」の搭乗員の装具、特攻隊員の遺書の寄せ書き帳、都城空襲の資料等を展示した戦争資料コーナーの一室があった。宮崎県内唯一の資料展示室だそうである。

史実によると、昭和20年4月6日は沖縄守備軍の総攻撃に策応した陸海軍唯一統合の特攻作戦が実施された日である。陸軍特攻107機の第一次航空総攻撃は、知覧、万世、都城西、喜界島、徳之島等の各基地から、海軍特攻227機の菊水第一号作戦は、串良、第一国分、第二国分、鹿屋、新田原等の基地からそれぞれ出撃が開始され、以後沖縄作戦の100日間、7月上旬までに、海軍は菊水作戦第一号から第十号まで791機、陸軍航空総攻撃は第一次から第十次まで605機が突入した。そして、戦後その出撃各地で慰霊祭が行われ、出撃基地跡には慰霊碑が建立された。

都城西飛行場は、昭和9年に造られた陸軍用飛行場であり、都城東飛行場は、昭和19年前半に、海軍が地元住民の協力により水田を埋め立てて急造したものである。

陸軍の振武特攻隊の中で、4月6日に出撃した振武隊に、何故「特別」と付いたのか、当時、都城基地の第百飛行団では、特攻作戦の準備が整っていなかったが、急遽10名の第一特別振武隊を編成し、振武特攻隊の先陣を切っ

たのではないかと推察する。

都城基地の陸軍特攻隊出撃記録を見ると、第一特別振武隊が　西飛行場を出撃して以降、他の振武隊は、海軍の東飛行場から出撃しているのが不思議に思えたので、調べてみると、その理由は、4月28日のB－29の爆撃によって西飛行場のコンクリート造りのエプロンなど飛行場設備が破壊され、出撃不能となったため、以後の出撃は東飛行場からとなったことが判明した。現地でしか分からない史実を知ることができた。

都城基地から出撃した陸軍特攻隊機は全て四式戦「疾風」で、戦没特攻隊員は79名であるが、陸軍の最新鋭戦闘機「疾風」は、特攻機の直掩のみならず、沖縄飛行場の攻撃、制空戦闘等幅広く任務に当たって活躍し、都城基地の第百飛行団からは、特攻戦死10名を含む62名の戦死者を出した。

7月上旬まで続いた特攻作戦の後は、本土決戦に備えた決号作戦が展開され、米軍が志布志湾に上陸するものと見込んで、薩摩半島の要塞化を目指し、都城もその一角を構成していた記録も目にすることができた。現地において、地勢を良く考えた作戦であることを実感した。ただ、資料館に四式戦「疾風」の機体や部品、その説明資料等がなかったのは残念であった。

慰霊祭終了時に、本資料館への案内もしていたが、当地を訪ねた際には是非、資料館にも立ち寄られることをお勧めしたい。

慰霊祭に、当顕彰会を代表して参列し、戦没者に慰霊の誠を捧げ、かつ、現地で史実を細かく知ることができ、このような機会を与えて頂いたことに感謝している。

「都城特攻振武隊はやて慰霊碑」前祭壇

都城歴史資料館

上・左　展示品の一部

平成26年度 豫科練雄飛会慰霊祭・招魂観桜祭に参列して

評議員　及川　昌彦

平成26年4月7日（月）正午より、晴天の下、豫科練雄飛会（会長・小林和夫氏）主催による「平成26年度豫科練雄飛会慰霊祭・招魂観桜祭」が靖國神社拝殿及び本殿において斎行され、当顕彰会代表として、原知崇会員と共に参列した。

今年度の参列者は、130名であった。拝殿には、スカイマスターズという楽団の勇壮な演奏で入り、君が代の斉唱で祭典が始まり、海ゆかばの献歌の後、本殿に昇殿して玉串を奉奠し、黙祷の後、退下し、靖國会館前で記念撮影をし、同会館「偕行の間」において、招魂観桜祭が行われた。

御遺族、来賓の紹介が行われ、献杯の後、スカイマスターズの海軍軍歌のメドレー演奏を聴きながらの会食となった。軍歌演習は、全員で「若鷲の歌」「艦船勤務」「同期の桜」を肩を組んで斉唱した。最後は、小林会長の挨拶で、来年もこの同じメンバーでの再会を期し、散会となった。

慰霊祭受付風景

招魂観桜祭（直会）会場風景

平成26年度 豫科練雄飛会戦没者靖國神社慰霊祭に参列して

会員　原　知崇

平成26年4月7日（月）、豫科練雄飛会慰霊祭・招魂観桜祭に参列させていただいた。

慰霊祭の行われた靖國神社は、前日まで「さくらまつり」が開催されており、風に花びらが舞う境内は、その賑やかな雰囲気をまだ残していた。

穏やかな天気の中、拝殿へ進むと、既に保坂副会長率いる一群の楽隊「スカイマスターズ」の奏楽が聞こえ、包まれるような柔らかい印象を受けた。

やがて正午となり、戦没された海軍飛行予科練習生を悼む慰霊祭典が開始された。参列者は乙飛出身者を中心に150名ほど。国歌斉唱に続き、修祓、献饌と続く。国歌斉唱と献饌の際にはやはり、同楽隊の演奏があった。華やかな調べに当初戸惑いを覚えた。しかし、献饌の際に演奏される「山の幸」という曲は、テープでは耳慣れた曲であったが、実際の演奏で聴くこの曲は、こんなにも美しい曲であったのかと驚くとともに、慰霊祭というイメージを固定概念でつい考えがちであったが、こうして様々な形があって、それが「らしさ」である。慰霊祭における音楽等の効果についても、改めて興味を持った。

式は祝詞奏上、小林会長による祭文と続いた。昭和33年の会の発足の経緯と現状、そして、海軍飛行予科練習生の制度について、簡潔明瞭にお示しになり、更に我が国と我が民族の繁栄を願いながら潔く散華された一万八五六四柱の御霊に対して、社殿にお降り頂いて、集いし同窓生と声なき声を以て語り合って頂ければと、心から願うという内容であった。祭文を拝聴し、この式典に流れる空気の中にある安らぎに合点がいった。御霊安かれのお気持ちを御祭神にお届けするのみならず、お降りになった御霊と参列者が時を共にし、声なき声で懐かしく往時を語り合う。これこそがこの慰霊祭の意義なのだと。次いで、献歌「海ゆかば」を斉唱し、本殿に昇殿して、玉串を奉奠し、拝礼、黙祷をもって慰霊式典は終了した。

その後、靖國会館に場所を移して、「招魂観桜会（直会）」が行われた。来賓紹介では、我々特攻隊戦没者慰霊顕彰会会員も紹介していただいた。ここでも楽隊の演奏があり、懐かしい「若鷲の歌」「艦船勤務」「同期の桜」の軍歌演習も実施された。

既に高齢化によって解散した甲飛会

のお手伝いをしていた私は、雄飛会の行事には今回初めて参加したが、かつての甲飛会と同じく、全ての取り仕切りを乙飛出身者が担当されており、皆様、往年の紅顔の予科練生を彷彿とさせる快活さで、業務に当たられているのが印象的であった。

一期一会

遺族会員　廣嶋　文武

菊の御紋章輝く特攻観音堂で、毎月18日の法要において、佛説摩訶般若波羅密多心經を読経し、５８４３名余の特攻勇士の長存不滅の光を称え、旧小田原代官屋敷の直会に移る生活を、ここ二十数年来続けている一人である。

そこでの私なりの「一期一会」を書き留めたいと思う（順不同、敬称略）。

【山主太田賢照師】先代太田睦賢僧正の御遺志を継いで、世田谷山観音寺の御堂を建立された後、紆余曲折の艱難を突破されて「特攻観音堂」を落慶され、本年度で実に63回の「特攻平和観音年次法要」を毎年秋分の日に営まれ、特に平成19年からは、神仏習合のより一層厳粛な祭典を執り行われ、私達遺族を始め全国から参集して下さる方々により、一層、特攻勇士達の偉業を称えて下さるのも山主が、兼照、恵淳の御二人の御子息共々御奉仕されて、観音堂の今日があるものと信じています。山主は近頃、「特攻観音経」を五箇国語くらいに翻訳して下さる方はいないかなと仰っていらっしゃる。

【宮下八郎さん】旧海軍百里原基地の先任整備長で、この海軍６０１空第一攻撃隊―Ｋ－１会でも毎年、靖國神社で慰霊祭があり、参加させて頂いた。私に、世田谷に特攻観音があり、毎年法要があることを教えて頂いた。昭和32年来世田谷に住み、また、靖國神社には、忠夫兄が特攻戦死した８月９日には毎年参拝していたのに、世田谷特攻観音のことは知らなかった私だが、その年の特攻観音年次法要に参列させて頂いた。そのすぐ近くに日大農獣医学部があつて、職業柄よく行っていたのに、同大学の馬場のすぐ上に観音様があったとは知らなかった。最初の出会いから、この下馬の霊城に通うこと二十数年、今日に至っている。

宮下さんは、長く特攻協会の評議員も務められ、海軍出身者の少ない本会のために貢献された。宮下さんにお会いしなかったら本会とのご縁もなかったかも知れないと思うと、誠に感慨深いものがある。

【最上貞雄さん】山形の旧最上城城主の末裔であると、陸士54期同期の元世田谷区議会議長の土田正人さんから伺った。さすがに元殿様の末裔らしくおっとりした方であった。何故か私を理事に推薦して下さったから、今日がある。当時副会長の岩下邦雄さん（零戦会会長）や回天に詳しい山田達男理事さんにも、何かと大変お世話になった。

【瀬島龍三さん】初代会長の竹田恒徳元宮様の後を継いで二代目会長になられた。平成５年「財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」を設立された。虎ノ門の第五森ビルの事務所は、緑の木々に囲まれた静かな場所で、その一等地のビルのオーナーの森社長さんとも昵懇の間柄であったと聞いている。瀬島会長さんは、「あなたのお兄さんは海軍でしたね。僕も海軍の参謀を兼ねて、鹿屋基地にいて、あの夕闇迫る滑走路の端で、海軍参謀の淵田美津雄中佐と、最後の一機まで特攻機の帰還を待ちましたよ」と、会議の合間に話し掛けられた。私に会うと、「あゝ廣嶋さん」と言って、親しく話し掛けて下さった。瀬島さんは関東軍の参謀になられ、終戦後は長くシベリアに抑留され、帰国後は財界人となられて、当時の中曽根総理の軍師としても著名な方であった。なお、淵田中佐は、広島と長崎の原爆の調査に当たられた稀有な軍人であられたと聞き及んでいる。

【山本卓眞さん】瀬島さんの後を継いで第三代目の会長を務められた。富士通の社長、会長を歴任された財界の大御所で、平成23年１月からは、新たに「公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会」の名誉会長として新しい時代への特攻顕彰会を導いて下さった。山本名誉会長のお兄さんの山本卓美中尉は、陸軍特攻勤皇隊長としてフィリピン・レイテのオルモック湾で特攻戦死された。私達が菅原道熙理事長の下、フィリピンでの慰霊祭に２度にわたって参加した時のことであった。ルソン島マバラカット基地での神風特別攻撃隊敷島隊長関大尉他の特攻隊員の慰霊祭を済ませ、セブ島からレイテ島へ渡り、オルモック湾に入って船上慰霊祭を執り行った時の感激を会長に話したところ、大変喜ばれた思い出がある。また、偶々前々回の東京都知事選挙の最中の出来事であるが、当日、靖國神社での特攻隊合同慰霊祭を終えて、直会のため市ヶ谷駅近くの私学会館へ移動したところ、お馴染みのドクター中松氏が、選挙の遊説中に立ち寄って休憩中であり、同氏は、世田谷山観音寺にも時々お参りに来て、太田賢照師とも顔見知りであったところから、短時間で良いから演説をさせてくれないか、との要

望があったので、私が、早速、山本会長にその旨伝えたところ、会長は、「ドクター中松氏は良く知っているが、協会の活動とは、性格も趣旨も異なる」とのことで、きっぱりと断わられた。著名な財界人であるが、物事にきっぱりとけじめを付ける、武人らしい会長の態度には、より一層尊敬の念を抱いた。帝国ホテルでのお別れの会に私も参列したが、同じ福岡県人とは知っていたものの、奇しくも誕生日（9月11日）まで同じであったとは、驚きであった。惜別の感一入なるものがあった。

【菅原道熙さん】最上元理事長が、後継者は菅原さんと心に決めてあったようで、協会のために筆舌に尽くし難い程の献身的な活躍をされた。終戦近くの陸軍第六航空軍司令官菅原道大中将閣下の三男と聞いていたが、本人は常に陸士61期で、戦場に行かなかった最後の軍人と仰っていた。直会などの席では常に会員の減少に心を痛めておられた。二度にわたるフィリピン・マバラカット・リリーヒル観音像前での、10月25日午前7時25分、関大尉他神風特別攻撃隊敷島隊の出撃に合わせた慰霊祭や各慰霊碑の巡拝、現地の市民や子供達との交流など感慨深い思い出ばかりである。菅原さんはまた、大阪芸大有志が制作したCD「あゝ特攻」の売上金の寄付を受け、その志を受け継いで、全国の護国神社に「特攻勇士之像」を建立奉納する事業を推進され、今や13都府県で見事に実現されているが、これによって特攻隊の永遠なる慰霊顕彰の事業が全国に広められつつある。私の故郷福岡にも、福岡県偕行会菅原道之会長を中心とする有志の方々のご尽力により、立派な「特攻勇士之像」が福岡県護国神社に建立奉納され、私もその除幕・奉納式に参列させていただいたが、遺族にとって何よりの慰めであり、感謝に堪えないところである。菅原さんは病魔に耐えて、何一つ弱音を吐くことなく、静かに旅立たれたようであるが、学究の徒でもあり、遺言により、遺体は全て「献体」されたと聞き、一層感慨深い思いに打たれた。

【深堀道義さん】菅原道熙元理事長の兄上で、海軍兵学校75期、最後の卒業生である。母方の深堀家を継いで養子となられた。深堀家は、肥前深堀藩主の末裔に当たるとかで、肥前大村藩よりも大きな勢力を有していたと聞く。なお長兄は戦死されたと聞くが、菅原家の歴史を感慨深く想起させられる。月例法要には、所沢のお宅から毎月お出でになり、物静かな話し振りで色々と伺った。貿易会社の経営とその相手国の中国に関する研究も緻密にされていた。更に、日本童話協会作曲会員でもあり、童謡・歌曲も多く発表しておられる。驚くなかれ、全国カッパ研究会の会員でもあった。『特攻の真実』『特攻の総括』を出版され、両書にそれぞれ「命令と献身と遺族の心」「眠れ眠れ母の胸に」とサブタイトルが付けられていて、深堀さんのお人柄が偲ばれるとともに、研究の深さに驚いている。更に『中国の対日政戦略』を読めば、15年前に出版されたものであるが、現在の中国を知ることができる。私の本棚に大切に保存されており、何時でも繙くことができる貴重な書籍である。

【木村元正さん】瀬島会長、最上理事長の下で、物静かに、正確に、万事を処理することのできた方であった。優れた能力を発揮されていたのに、急逝されたのは残念なことであった。私と同年配であられただけに、その思いが強い。

【栗原　宏さん】大学卒業後自衛隊に入られ、退官後に本会事務局で木村局長の下で会計事務を担当されていた。本顕彰会は、多くの志ある賛同者と相当な浄財の寄附があってこそ維持されているが、それら資金の運用に当たっては、金融筋に通じ、相当な知識を必要とし、かつ栗原さんのようなお人柄があってのことと信じている。少ない手持ち資金の運用に当たり、栗原さんは常に高ぶらず、黙々と着実に運用され、会の財政基盤を築き上げられた。その功績は誠に大きいものがある。

【深川　巌さん】横浜から毎月参詣され、各分野にわたって話題を提供して下さった。第197振武隊隊長として出撃前に終戦となったと聞き及んでいる。後述のように、M・G・シェフタルさんに招待され、静岡大学のゼミで深川さんが講義をされた時に私も同行したが、非常に感慨深く拝聴した。

【野口清二さん】海軍の軍艦砲術の第一人者と言われた方である。日本国防協会理事もされていた。戦艦大和の出撃は「特攻」ではないか、と主唱され、協会も検討の結果、準特攻として戦没者の名簿を『特別攻撃隊全史』に収録した。恒例の、毎年秋分の日の特攻平和観音年次法要は、長年にわたって、野口さんによる「梵鐘点打三回」で開始された。心に響く、野口さんの梵鐘点打であった。

【浅井達三さん】海軍報道班員としてラバウル基地で、山本五十六聯合艦隊司令長官の、純白の第二種軍装姿の最後の勇姿を撮影された。極秘とされたため、長官機への同乗が許されず、長官戦死の報を聞くや、そのフィルムを

胸に飛行機を乗り継ぎ、乗り継ぎして内地に帰還し、長官戦死の報と共に、ニュース映画に、あの時元気に答礼された山本長官の勇姿が映し出された。僅か1分足らずの1シーンであるが、浅井さんの努力のお陰であった。浅井さんは戦後も報道カメラマンとして活躍され、極東軍事裁判の際には、1日も欠かさず裁判の報道写真を撮り続けたと聞いている。法要の直会でも、特攻基地の通信室に入ると、特攻隊員が打ってくる「我、突入ス」との、最後の「ツートン」という電信音が耳に焼き付いて離れない、と話しておられ、「命ある限り、祈りに来ます」と仰っておられた。浅井さんの葬儀の際は、最上理事長の都合が付かず、私が弔辞を捧げることになり、徹夜で、浅井さん、浅井さんと呼び続けながら弔辞を書き上げ、感慨を込めて御霊前に弔辞を捧げ、別れを惜しんだ。ご苦労の多かったお体に、若々しい血潮が甦る感じがした。浅井さんの御尊父は、講談師の大島八鶴師匠である、と太田山主から後に伺った。

【原　勝洋さん】私に下さった『真相　カミカゼ特攻隊』は、原さんが、アメリカ・メリーランド州カレッジパークにある「国立公文書館Ⅱの２８６０箱中１２６箱から選んだ写真集であって、原さんは、写真の一枚一枚に「特攻勇士達」の、物言わぬ人々の魂を読み取り、日時ごとの特攻攻撃と出撃者の名簿が要領よくまとめてある貴重な一冊である。「KAMIKAZE Special Attack 必死必中の３００日」と帯封に書いてある。また、『真相　戦艦大和の最期―写真と新資料で解明―』も、素晴らしい戦記であるが、原さんは、活字より写真が真相を語る、と解説されている。素晴らしい協力者に「サヨナラ」も言えずに会えなくなったここ数年が私なりに悔しい限りである。「本当に有り難うございました」と申し上げたい。

【武田輝和さん】月例法要の18日には台東区から欠かさず参詣され、直会では、現社会に「教育勅語」が必須であるとのお話を承ったが、立派に印刷された、明治23年10月23日御下賜の「教育勅語」を、初めて特攻観音に参詣して来た人達に手渡しておられた。私も頂き、世田谷区の教育委員5名の分も頂いて送付したが、誰一人として受け取ったとの返事がなく、これが、武田さんの嘆かれていた現在の教育者か、と我ながら武田さんに申し訳なく、また、これが現在の教育の実態か、と今でもその思いを強くしている。私は、その「教育勅語」を玄関に飾り、毎日「拳々服膺」している積もりである。武田さんは、特攻観音堂の厨子横の金箔の蓮華も、自費で寄進されている。太田山主さんにも、いずれ必要になるだろうと、手製の杖をプレゼントされている。

【中野富雄さん】自衛隊退官後、「自主憲法調査研究員」として、これからの日本の在り方について意見を陳述され、憲法改正、特に9条の改正については、私見のみならず、各種会合における意見や世論も開陳して下さり、特攻精神についても、多くの時間を割いて述べられ、私も、その温厚なお人柄を慕っていただけに、深く感銘を受けていたが、何時の頃からかお目に掛からなくなってしまった。分厚い封書も頂き、大切に保存している。

【Ｍ・Ｇ・シェフタルさん】アメリカ人で、現在、国立静岡大学情報学部教授をしておられ、ここ10年位、例会・直会にも顔を出しておられないが、18日が日曜日だと、静岡から出てこられて、巨躯を折り曲げて、多くの方々と語り合っておられた。一度お会いしたら永久に忘れられない方で、多く話し合った。彼の平成13年9月11日のニューヨークの同時多発テロ事件の直後、「特攻」について本を書きたいと言われたので、「知覧や鹿屋を見ずして本は書けない」と忠告したところ、「案内してくれ」と言われ、鹿児島空港からレンタカーで、知覧特攻平和会館、特攻平和観音堂、旧知覧基地内の三角兵舎や弾痕生々しい木造の塔など、旧知覧町役場の課長さんに案内していただき、当日は、鳥濱トメさんの旧家・旅館に一泊し、翌日は旧鹿児島航空隊跡の「貴様と俺の碑」で私の兄の戦死者名簿を見届け、桜島を横切って鹿屋基地を訪れ、同記念館で零戦に会い、説明を受けたりして2日間、シェフタル先生の取材を手伝った。念願の出版は、『散華　BLOSSOMS IN THE WIND～HUMAN LEGACIES OF THE KAMIKAZE～』と題する４８０頁の分厚い本で、米国でもすぐに完売となり、靖國神社の「靖國偕行文庫」に1冊寄贈されている。余談になるが、靖國神社参拝後、帰途九段下の交差点で、天皇陛下の御料車が停車し、シェフタル先生が慌ててカメラを取り出し、車中の陛下をパチパチと撮り出した。偉丈夫な外国人が2～3ｍの近距離から、手を振って笑顔でお答えになる天皇陛下をカメラに納めたのは、シェフタル先生以外にはいないのではないかと思う。その唯一の幸運なアメリカ人として喜び一杯の様子であった。シェフタル先生は、この本に「こ

の一冊で日米の友情はより深く、世界平和はより近くなるように」とサインして下さった。貴重な1冊は、今は亡き兄の写真と共に机上に置かれている。

以上は、特攻観音堂や直会で、私がお会いし、尊敬して止まない方々を偲んで書き留めたが、このうち御健在なのは、山主太田賢照師とシェフタル先生のお二方だけであるが、これも私の兄廣嶋忠夫一飛曹が、二十歳の青春を大東亜戦争終戦の6日前の昭和20年8月9日午後6時15分頃、金華山沖で愛機彗星と共に「悠久の大義に尽くす」と散り去ったことで、多くの方々と私なりの「一期一会」を書き留めることができたと、心から感謝しながら筆を擱くことにしたい。

安倍首相の靖國神社参拝に思う

会員　茂木　尚

昨年の12月26日、安倍首相が靖國神社に参拝された。参拝後、「日本のために尊い命を犠牲にされた御英霊に対し、尊崇の念を表し、御霊安らかなれと手を合わせた」。そして「二度と戦争の惨禍で人々が苦しむことのない時代をつくる」との談話を発表された。

それに対し、マスコミ各社は総じて批判的な論調で、首相の靖國神社参拝を報じた。翌日の新聞各社の社説を見ると、毎日新聞は「外交孤立を招く誤った道、侵略を否定するのか」、北海道新聞は「国益を損なう愚かな選択」、朝日新聞は「政教分離は？平和主義は？」と安倍首相の靖國神社参拝を真っ向から批判した。一方、産経新聞は「国民との約束を果たした、平和維持に必要な行為だ、慰霊は指導者の責務」、読売新聞は「一国の首相が戦没者をどう追悼するかについて、本来他国からとやかく言われる筋合いもない」と安倍首相の靖國神社参拝に肯定的な論調であった。

安倍首相の靖國神社参拝に反対するマスコミ各社の論拠は、①靖國神社にはA級戦犯が合祀されている、②政治家の参拝は政教分離の原則に反する、③他国が反対する中での参拝は国益に反する、の三つにまとめることができると思う。

①のA級戦犯については、先の大戦の戦争責任が、A級戦犯だけにあるのかどうか大きな疑問がある。当時、現役の大学生で、海軍の予備学生になった方々は「いくら軍の上層部が戦争をすると言っても、国民の協力がなければ戦争なんかできなかった。軍の意向を汲み、世論を開戦へと誘導していったマスコミの責任は大きい」と口を揃えて仰っている。当時の新聞を見ても、新聞各社が軍の広報的な役割を果たし、戦争に加担していたのは明らかで、多くの有為な若者を戦場に駆り立て、死地へと追いやった。現在の新聞各社は、その自己の責任を忘れ、全てがA級戦犯の責任であるかのような立場を取っているように思われる。

②の政教分離の原則については、政治家の伊勢神宮への参拝や、宗教団体に支えられた政党のことを厳しく追求する訳でもないので、靖國神社参拝の時だけ、便宜的に利用している論理にすぎないと思う。

③の他国、特に中韓が反対する中での参拝は国益に反するとの論理であるが、昭和53年にA級戦犯が合祀され、その後当時の首相が何度も靖國神社に参拝しても、中韓からは何の抗議もなかったとのことである。中韓が騒ぎ出したのは、昭和60年の中曽根首相の公式参拝からだということで、明らかに中韓の国内事情により政治利用を始めたのではないかと思う。国益に反するから参拝をしてはいけないという論理は、大戦当時の、国の為には私を捨てろという論理と根本は同じで、とても賛同できるものではない。

また、「誰にも気兼ねなく参拝できる国立の追悼施設を造ろう」という意見もあるようであるが、例え、そのような施設が出来ても、遺族がそこへ足を運ぶことはないと思う。戦死した方々は、「靖國神社で会おう」を合言葉に、戦場に散って逝かれたからである。

靖國神社へ参拝に行くと、もう90歳を超えられたのではないかと思われる方が、九段の坂を一歩一歩踏み締めながら社前へ向かう、そんな姿をよく見掛ける。途中で何度も足を止め、腰を伸ばして汗を拭き、また思い直したようにして社前へ向かって歩を進める。そこには、先の大戦で国の為に命を捧げた父親や兄弟の御霊が祀られていると信じるからであろう。

「もうこれが最後の参拝という祖母の
　手をひきてのぼる九段の坂を」

これは、学徒出陣で海軍に入隊し、神風特別攻撃隊第三昭和隊隊員として、昭和20年4月16日、沖縄方面で特攻戦死された中村栄三少尉の姪御さんが、中学生の時に詠まれた歌である。

肉親の御霊を弔う為に、全国各地から靖國神社に参拝に訪れる遺族の姿が、いつの時代になっても変わることはない。政治的な思惑に左右されることなく、静かに参拝をしたいものである。

沖縄戦終結60周年を記念してアメリカで開催されたシンポジウム

2005年（平成17年）９月17日～18日、アメリカ合衆国テキサス州フレドリックスバーグ市において、「太平洋戦争『沖縄』シンポジウム」が開催された。ニミッツ提督財団、フレドリックスバーグ独立学校管区・セントエドワーズ大学、テキサス歴史委員会、テキサス工科大学、合衆国海軍協会、テキサス・ヒルカントリー共同協会、テキサス公園・野生動物部の共催によるもので、終戦60周年を記念して行われた。

このシンポジウムに、日本側の代表として当顕彰会の前評議員皆本義博氏（陸士57期、陸上自衛隊幹部学校教官、陸将補）が招かれてこれに参加され、地元サンアントニオ・エクスプレス・ニュース社の新聞「メトロ」の2005年９月17日付け土曜版に「オキナワ、60年後、かつての敵同士が会う」、また「第２次世界大戦の敵同士が今、友人として会う」との見出しで大きく報道され、感動的な場面を現出した。

また、同シンポジゥムにおいて、皆本氏はそのテーマである戦略情勢と日本軍、米軍の初期作戦、戦艦大和とカミカゼ、ロジスティックス、首里ラインの突破、沖縄戦が後世に残したもの等について、自らの体験に基づき実に素晴らしい見解を発表されたとして、主催者側から称賛された。

以下に、別紙として、シンポジウムのプログラム、新聞報道記事、関連する資料等を訳文を添えて掲載する。なお、訳文は当会会員倉形　寛・桃代御夫妻の労作である。

◇　◇　◇

（別紙１　訳文）

ニミッツ提督州歴史館・太平洋戦争国立博物館

フレドリックスバーグ・テキサス州

シンポジウム開催

2005.　9．17～9．18

オ　キ　ナ　ワ

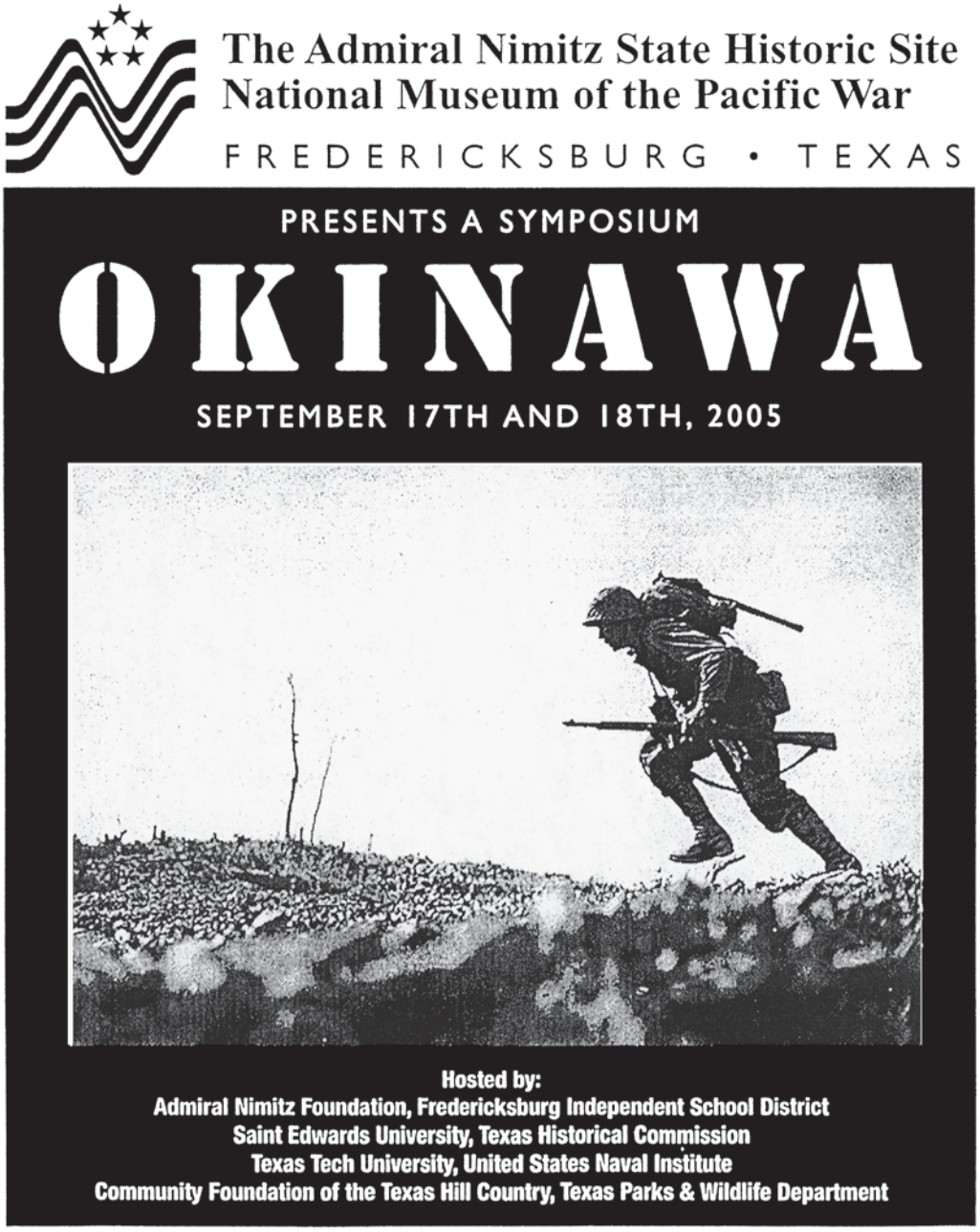
主　催

ニミッツ提督財団，　フレドリックスバーグ独立学校管区

セントエドワーズ大学，テキサス歴史委員会

テキサス工科大学，合衆国海軍協会

テキサス・ヒルカントリー共同協会，テキサス公園・野生動物部


The Admiral Nimitz State Historic Site
National Museum of the Pacific War
FREDERICKSBURG • TEXAS
PRESENTS A SYMPOSIUM
OKINAWA
SEPTEMBER 17TH AND 18TH, 2005
Hosted by:
Admiral Nimitz Foundation, Fredericksburg Independent School District
Saint Edwards University, Texas Historical Commission
Texas Tech University, United States Naval Institute
Community Foundation of the Texas Hill Country, Texas Parks & Wildlife Department

オキナワ

第１日　2005.　9．17

9：00a.m. to 5：00p.m.

旗衛：　海軍幼年予備士官養成隊，フレドリックスバーグ高校

国歌：　シェリル　カデルリ

宣誓：　海軍幼年予備士官養成隊候補生，フレドリックスバーグ高校

挨拶：　C．D．グロージーン，米海軍退役少将

冒頭：　F．ローレンス・オークス，テキサス歴史委員会会長

司会：　ポール・スティルウェル

セッション１：戦略情勢と日本軍―エドワード・ドレア博士

退役軍人講師：皆本義博将補，アボット・スパークス

（休憩）

セッション２：米軍と作戦初期―ジョセフ・アレクサンダー

退役軍人講師：メルビン・グラント，ウィリアム・コッタス，

ハワード・ラケイ，ベン・マクドナルド，アボット・スパークス

（昼食）

セッション３：大和と神風―ジェームス・ホーンフィッシャー

退役軍人講師：ドーグ・エイケン，レス・キャフェイ，

フランシス・フェリー，アル・ラーマン，皆本義博将補

（休憩）

セッション４：兵站と支援―リチャード・フランク

退役軍人講師：ルイス・レイシー，アル・ラーマン，アレン・オリバー，

アボット・スパークス

◇

オキナワ

第２日　2005.　9．18

9：00a.m. to 3：00p.m.

開会挨拶：　ヘレン・マクドナルド

スポンサー挨拶：テキサス・ヒル・カントリー共同協会

主眼の辞：　ドン・ゴールド・スタイン博士

Okinawa
17 September, 2005 – Day 1
9:00 a.m. to 5:00 p.m.

Post Colors:	NJROTC Fredericksburg High School
National Anthem:	Cheryl Kaderli
Pledge of Allegiance:	NJROTC Cadet, Fredericksburg High School
Welcome and Introduction:	Rear Admiral C.D. Grojean, USN (Ret)
Remarks:	F. Lawrence Oaks, Executive Director Texas Historical Commission
Moderator for Symposium:	Paul Stillwell
Session One:	Strategic Situation and Japanese Forces – Dr. Edward Drea Veteran Presenters: MGen Yoshiro Minamoto, Abbott Sparks
Break	
Session Two:	U.S. Forces and Initial Operations – Joseph Alexander Veteran Presenters: Melvin Grant, William Kottas, Howard Laquey, Ben McDonald, Abbott Sparks
Lunch Break	
Session Three:	The Yamato and the Kamikazes – James Hornfischer Veteran Presenters: Doug Aitken, Les Caffey, Francis Ferry, Al Lerman, MGen. Yoshiro Minamoto
Break	
Session Four:	Logistics and Support – Richard Frank Veteran Presenters: Lewis Lacy, Al Lerman, Allen Oliver, Abbott Sparks

Okinawa
18 September, 2005 – Day 2
9:00 a.m. to 3:00 p.m.

Opening Remarks:	Helen McDonald
Co-Sponsor Remarks:	Community Foundation of the Texas Hill Country
Keynote Address:	Dr. Don Goldstein

セッション５：首里ライン突破―ジョン・ウコヴィッツ

退役軍人講師：ドン・デンカー，メルビン・グラント，

チャールス・キルバトリック，ウィリアム・コッタス，ハワード・ラケイ

（休憩）

セッション６：沖縄戦の終了とその後への関わり合い―リチャード・フランク

退役軍人講師：ドン・デンカー，デヴィッド・エリス，ボブ・グリーン，

ウォーレン・ツネイシ，皆本義博将補

（昼食）

セッション７：戦闘の影響―歴史家

ジョウ・アレクサンダー，エド・ドレア，リチャード・フランク，

ドン・ゴールドスタイン，ジェームズ・フォーンフィッシャー，

ジョン・ウコヴィツ

閉会の辞：　ジョー・カバノー館長

◇

アルヴィン・ラーマン

アルヴィン・ラーマンは、1942年９月に米海軍に入隊した。1947年２月に海軍を去るまで、海軍パイロットとして、ワイルドキャット、コルセア、ベアキャットを操縦した。沖縄戦の間、護衛空母シャムロック・ベイ（CVE-84）搭載のFM－２ワイルドキャットを操縦していた。彼の部隊の任務は、沖縄の友軍地上部隊に対する航空支援であった。ラーマンは現在、インディアナ州インディアナポリスに住んでいる。

ベン・マクドナルド

ベン･マクドナルドは、1925年10月28日に、テキサス州オースチンに生まれた。1942年にオースチン･ハイスクールを卒業し、テキサス大学に入学する。1945年１月に海軍科学、用兵学、経済学の学位を修得して卒業した。彼は、1945年１月から終戦までの間、巡洋艦ウィチタ（CA－45）の砲術・通信士官として勤務した。マクドナルド中尉は、1946年６月に予備役に編入されると、テキサス大学に戻り、1949年に法律学の学位を修得した。その後、弁護士やテキサス州法務長官の特別顧問として勤務し、また、ベリー・コンタクティング社の顧問弁護士としても活躍した。彼はまた、テキサス大学、サウスウェストテキサス州立大学、デル・マー大学、そしてコーパス・クリスティにあるテキサスA&M社において経済学と法律学の教鞭を執った。彼は、1961年から1963年までコーパス・クリスティ市長を務め、現在も多くの民間団体に勤務している。彼は、石油ガスに関する法律からカミカゼまで、様々なテーマで25以上の論文と書籍を出版した。ベンと夫人には、４人の子供、７人の孫、１人の曾孫があり、現在、コーパス・クリスティに在住している。

Session Five:	Breaking the Shuri Line – John Wukovits Veteran Presenters: Don Dencker, Melvin Grant, Charles Kilpatrick, William Kottas, Howard Laquey
Break	
Session Six:	The End on Okinawa and Implications for the Future – Richard Frank Veteran Presenters: Don Dencker, David Ellis, Bob Green, Warren Tsuneishi, MGen Yoshiro Minamoto
Lunch Break	
Session Seven:	Impact of the Battle – Historians' Roundtable: Joe Alexander, Ed Drea, Richard Frank, Don Goldstein, James Hornfischer, John Wukovits
Closing Remarks:	Joe Cavanaugh, Museum Director

Alvin Lerman

Al Lerman entered the U.S. Navy in September, 1942 and remained in the Navy until February of 1947. As a naval aviator, he flew Wildcats, Corsairs and Bearcats. During the Okinawa campaign he was flying an FM-2 Wildcat from the aircraft carrier USS Shamrock Bay, CVE-84. His unit provided air support to the ground troops on Okinawa. Mr. Lerman currently lives in Indianapolis, Indiana.

Ben McDonald

Ben McDonald was born in Austin, Texas on October 28th, 1925. He graduated from Austin High School in 1942 and enrolled at the University of Texas where he graduated in January,1945 with a degree in Naval Science and Tactics and Economics. He served as gunnery-communications officer on the USS Wichita (CA-45) from January, 1945 until the end of the war. LT(jg) McDonald was released to inactive duty in June, 1946. He returned to the University of Texas where he received his law degree in 1949. He has served as a trial attorney, a law firm partner, Special Assistant to the Attorney General of Texas and as a General Counsel for Berry Contacting. He has taught Economics and Law at the University of Texas, Southwest Texas State University, Del Mar College and Texas A&M Corpus Christi. He was Mayor of Corpus Christi from 1961-63 and has served or is presently serving in many civic organizations. He has published over twenty-five articles or books on subjects ranging from oil and gas law to kamikazes. Ben and his wife currently live in Corpus Christi and have four children, seven grandchildren and one great-grandchild.

Major General Yoshiro Minamoto

Major General Minamoto was born in Kumamoto on the island of Kyushu on May 25th, 1922. He entered the Army Academy in April, 1941 and graduated in April, 1944 and was commissioned as a Second Lieutenant in July. In September, 1944 he was assigned as Commander, #3 Company, Special Mission Battle Group. His unit's mission was to attack enemy ships and landing forces with their small boats at night. After the war, he returned to Japan in 1946 and in 1951 he became a Captain in the Japanese Self-Defense Forces (JSDF). He was promoted to Colonel in 1969 and to Major General in 1975. Major General Minamoto retired in April, 1977. During his service in the JSDF, he served as a professor at the War College, Vice President of the JSDF Service School of Logistics and as Chief of the recruiting section. He currently serves as Director of the association of retired JSDF personnel. He lives in Japan.

皆本義博将補

皆本将補は、1922年５月25日に、九州の熊本で生まれた。1941年４月に陸軍士官学校に入校し、1944年４月に卒業した。同年７月に少尉に任官し、９月に特別任務戦闘群の第３戦隊指揮官に任ぜられた。彼の部隊の任務は、装備する小型ボートにより、夜間、敵艦船や上陸部隊を攻撃することであった。戦後、1946年に本土に戻り、1951年に１尉として日本国自衛隊に入隊した。1969年に１佐となり、1975年には将補に昇任した。1977年４月に皆本将補は退役するが、それまで幹部学校教授、兵站関連の術科学校副校長、募集課の長を務めた。現在、退役自衛官の協会の長である。日本国内在住。

◇　◇　◇

（別紙２　訳文）

太平洋戦争国立博物館よりの書簡

（2005年10月４日付け、皆本義博将補あて）

親愛なる皆本将軍

この度は、この講義のテーマ：戦略情勢と日本軍、戦艦大和とカミカゼ、沖縄戦の終了とその後の影響に関わる自らの体験に基づいた、実に素晴らしい発表に対し感謝いたします。「良くやった！」貴方の個人的な話は、歴史家たちの概観と相まって実に意味深く、洞察力に富むものでありました。「ウエル・ダン」、参加者からの評価は驚くものではありませんでした。貴方には、非常に高い賞賛の辞が寄せられ、絶賛されていることは明らかです。我々は、このプログラムを常に前進させることに労を惜しまなかった貴方に感謝いたします。

このシンポジウムに参加されるために、はるばる遠方から来られたご労苦に、太平洋戦争国立博物館及びニミッツ提督財団に代わり、改めて深く感謝いたします。自ら進んで参加されたことに敬意を表します。どうか今後とも手を繋いでいきましょう。

敬　白

C. D. グロージーン　　ジョー・カバノー
米国海軍，退役少将　　博物館長
貴方がこのプログラムに参加されたことをとても誇りに思います。

ヘレン・B・マグドナルド　　リチャード・クーン
プログラム部長　　教育調整官

◇　◇　◇

(別紙２)

ADMIRAL NIMITZ FOUNDATION
328 E. Main Street
Fredericksburg, Texas 78624
830/997-8600 Telephone
830/997-8092 Fax
www.nimitz-museum.org - Website

Officers
Chairman
John C. Kerr

President
Bruce H. C. Hill

Vice President
John Schrock, Sr.

Secretary-Treasurer
Ronald L. Woellhof

Executive Director
RADM C.D. Grojean, USN (Ret)

Directors
James Avery
Ann McAshan Baker
David Q. Bates, Jr.
Gen Billy J. Boles, USAF (Ret)
Ann Brey
Mrs. Dor W. Brown, Jr.
Kenneth L. Burenga
Sherman D. Durst
Case D. Fischer
Mrs. Cullen M. Godfrey
John R. Goodwillie
Steven K. Howell
Douglass H. Hubbard
LTG Neal T. (Tom) Jaco, USA (Ret)
R. Bruce LaBoon
Frederick C. Lough, M.D.
Texas Senator Eddie Lucio, Jr.
Paul D. Meek
CAPT Thomas H. Murray, Jr., USNR (Ret)
Robert B. Phelps
CAPT Kenneth W. Prescott, USNR (Ret)
George E. Seay, III
Greg Shrader
Sam Bell Steves
Roy E. Stroeher
William A. Wareing
Jay T. Young

Honorary Trustees
W.J. Bowen
George H. W. Bush
William E. Dozier, Jr.
John C. Fitch
Senator Kay Bailey Hutchison
ADM B.R. Inman, USN (Ret)
Baine P. Kerr
Brig Gen Robert F. McDermott, USAF (Ret)
P. O'B. Montgomery, Jr., M.D.
Nancy Brown Negley
Brian E. O'Neill
Cliff Robertson
David Robinson
Gordon E. Sauer
Mrs. Roberta Warren

Supporting
The National Museum of the Pacific War
Admiral Nimitz Museum
George Bush Gallery
Pacific Combat Zone
Japanese Garden of Peace
Center for Pacific War Studies

National Museum of the Pacific War
340 E. Main
Fredericksburg, Texas 78624
(830) 997-4379 x228 email; Helen.mcdonald@tpwd.state.tx.us

4 October 2005

MGen Yoshiro Minamoto
2-21-9 Kasiwa cho ski ~~ki~~
Saitama ken 353-0007 Japan

Dear General Minamoto::

Thank you for the truly fine presentations on your experiences related to the sessions on Strategic Situation and Japanese Forces, the Yamamoto and Kamikazes and the End on Okinawa and Implications for the Future. Bravo Zulu!! Your personal stories, in conjunction with the historian's overview were so very meaningful and insightful, "well done". The returned evaluations from the attendees were no surprise. You were given exceptionally high praise and it is certainly well deserved. We so appreciate all the time and effort you put forth on the program.

Thank you again, we appreciate you making the effort to travel such a distance to participate in the symposium on behalf of the National Museum of the Pacific War and the Admiral Nimitz Foundation. Thank you so much for your generous participation. Please stay in touch.

Yours truly,

C. D. Grojean, USN
Rear Admiral, USN (Ret)

Joe Cavanaugh
Museum Director
I feel so honored you were part of this program.

Thank you
Helen

Helen B. McDonald
Director of Programs

Richard Koone
Richard Koone
Education Coordinator

We inspire our youth by honoring our heroes

（別紙３　訳文）

メトロ

サンアントニオ

エクスプレス・ニュース

2005．９．17（土）

オキナワ、60年後、かつての敵同士が会う

日本の特攻隊指揮官とアメリカ兵が、彼らの第２次世界大戦従軍のときを思い起こす

シグ・クリステンセン担当（エクスプレス・ニュース軍事記者）

フレドリックスバーグ発

退役将補・皆本義博とウイリアム・コッタスは、退役軍人の中で、幸運にも風変わりな人たちである。彼らは、かつて敵同士であり、第２次世界大戦中の一つの大きな戦闘における生存者でもある。皆本は、沖縄で多くのアメリカ海軍将兵を殺戮する特攻兵の１群の指揮を執り、コックスは、その特攻兵たちを追いつめる任に就いていたのである。

彼らは生き残り、その後60年を生きた。そして、太平洋戦争に捧げられたフレドリックスバーグ博物館において、去る金曜日に初めて友人として会った。彼らは引き合わされた。「お会いできて嬉しいです」とコッタスが言う。「旧友」と皆本が応えた。この会見は、本日と日曜日に行われる、沖縄戦に関するシンポジウムの序幕として、太平洋戦争平和の庭園の国立博物館において行われたが、たどたどしいものであった。しかし、彼らが以前出会った時よりもずっと快適なものであった。

コッタス（86歳、ネブラスカ州・クリート）と第77歩兵師団の兵士たちは、1945年沖縄進攻数日前に、皆本と日本軍の小型特攻艇の乗員たちを捜索した。コッタスとほかの兵士たちは、沖縄近くの島・慶良間列島に集結した。

皆本（現在83歳、東京近郊在住）は、30隻の特攻艇を指揮していた。この特攻艇は、全長18フィートで、500ポンドの爆薬を積んでいた。コッタスは、島にある多くの洞穴の一つの中に隠されている特攻艇を待ち伏せる分隊の一人であった。

第２次世界大戦の敵同士が今友人として会う

皆本は語る。3,000隻以上の特攻艇が作られ、400隻くらいが戦闘に参加した。武装の無いベニヤ板製の特攻艇に、彼らは拳銃と刀、幾らかの手榴弾を持ち込んだ。

特攻艇の任務は、戦闘中にアメリカ軍の駆逐艦に体当たりをすることであり、300隻以上の特攻艇が、この任務に参加した。

皆本は、特別任務哨戒群の指揮官に志願したわけではなかったけれども、その時、若い中尉だったので、当然その準備はできていた。

「それはやらなければならない任務だった。」、「自分も人間だ。死ぬのは怖い。しかし、その恐怖を克服しようと決意した」と皆本は言う。

今は郵便集配人も辞めているコッタスは、1945年の３月26日に島へ行った。彼は、MIライフル（狙撃仕様）とBARで武装していた。そのBARは、彼の仲間が前進する時、敵を釘付けにするためのものだった。

(別紙３)

SAN ANTONIO EXPRESS-NEWS
SATURDAY
SEPTEMBER 17, 2005
SECTION B
METRO

One-time enemies meet 60 years after Okinawa

Japanese suicide leader and American soldier recall their World War II service.

BY SIG CHRISTENSON
EXPRESS-NEWS MILITARY WRITER

FREDERICKSBURG — Retired Maj. Gen. Yoshihiro Minamoto and William Kottas, happily, are oddities among war veterans.

They're old foes, survivors of one of the great battles of World War II, with Minamoto commanding a group of suicide soldiers meant to kill American sailors off Okinawa and Kottas trying to hunt the crews down.

They survived, lived another 60 years and met as friends for the first time Friday at a Fredericksburg museum dedicated to the Pacific war.

"Nice to meet you," Kottas said as they were introduced.

"Old friend," Minamoto replied.

The meeting at the National Museum of the Pacific War's Garden of Peace, a prelude to a symposium on the battle for Okinawa that runs today and Sunday, was a tad awkward. But it was far more pleasant than the last time they crossed paths.

Kottas, 86, of Crete, Neb., and other members of the 77th Infantry Division hunted Minamoto and other crews of the small Japanese suicide boats days before Okinawa was invaded in 1945. Kottas and other soldiers converged on Kerama Retta, an island near Okinawa.

Minamoto, who is now 83 and lives outside Tokyo, had led 30 boats — each 18 feet long and packed with 500 pounds of explosives. Kottas was part of a squad that laid an ambush for the boats in one of the island's many coves.

More than 3,000 of the boats were

See WW II/6B

彼の分隊の任務は、特攻艇が海へと出撃する前に沈めてしまうことであった。

皆本と彼の部下は、洞穴の中で攻撃の訓練をし、準備は整っていた。しかし、戦闘の直前に東京から無線連絡が来た。特攻艇を沈めよ、という命令であった。アメリカ海軍は、慶良間海峡を封鎖し、特攻艇がその任務を遂行することを不可能にした。

コッタスと皆本は、お互いに立ち向かったことは無かったが、間もなく島内で銃撃戦となった。僅か30分間で皆本は、７人の部下を失い、島の山中に後退した。コッタスと彼の仲間は、特攻艇の乗員と交戦した。その後、沖縄本島と伊江島で戦った。

二人とも心身に傷を負って家に戻った。コッタスの悪夢は夜明け前に最悪だった。それは、太平洋での戦闘の多くが始まった時間帯であった。

「彼は、出征した時の彼と同じ人ではなかった。」彼の妻ヘレンは語った。

お互いに友人として並んで座った。しかし、皆本は、もし必要であれば、再び死ぬまで戦うであろうことを認めた。

コッタスは違った考えを持って語る。「我々は暫くここにいる。何故殺し合うのか？」

平和の庭園において、二人は軍人として人生について語り合った。皆本は、戦闘前のアメリカ側の偵察能力を称賛した。

「我々は、それぞれの側で多くの生命を救ったと思う」とコッタスは言う。

二人が庭園を出る時、皆本は微笑んで言った。「私の親友」

◇

○写真説明：日本の皆本義博（左）とネブラスカ州のウィリアム・コッタスは、フレドリックスバーグで初めて会った。二人は沖縄で戦った。

◇

○太平洋戦域における重要日

1941年12月７日	日本はパール･ハーパーの合衆国軍事基地を爆撃。翌日、合衆国、英国、カナダは、日本に対し宣戦布告。
1942年４月９日	バターン半島で、アメリカ及びフィリピンの部隊が降伏。
４月18日	ドゥリットルの爆撃機が東京を攻撃。
５月４～８日	サンゴ海海戦により、ポートモレスビーのオーストラリア軍基地に対する日本軍の攻略計画を阻止。
６月４～６日	ミッドウェイ海戦で日本を負かす。
８月７日	アメリカ海兵隊、ガダルカナル島上陸。
1945年３月16日	アメリカ軍、硫黄島を攻略。
６月21日	連合軍、沖縄を攻略。
８月６、９日	広島、長崎に原子爆弾投下。
８月14日	日本、無条件降伏を受諾。

WW II foes now meet as friends

CONTINUED FROM 1B

manufactured, and 400 or so saw action, Minamoto said.

He carried a handgun, sword and some grenades on the boat, which had no armaments and was made of plywood.

The boats' job was to ram into U.S. destroyers during battle. More than 300 boats were dedicated to that mission.

Though he did not volunteer to head the Special Mission Patrol Group, Minamoto, then a young first lieutenant, was quite prepared to do it.

"That was a duty to do," Minamoto said. "I'm just a human, I'm afraid of dying, but I was determined to conquer the fear."

Now a retired letter carrier, Kottas came to the island March 26, 1945. He was armed with an M-1 sniper rifle and a Browning automatic rifle that was used to pin the enemy down as his fellow soldiers moved forward. His squad aimed to sink the boats before they could move into the open sea.

Minamoto and his men had practiced attack runs in the coves and were ready. But a radio message from Tokyo shortly before the battle ordered them to sink their boats. The U.S. Navy had closed the Kerama Strait and made it impossible for the suicide crews to complete their mission.

Though they never faced each other, Kottas and Minamoto soon got into firefights on the island. Minamoto lost nine men in just a half-hour and retreated into the mountains. Kottas and his men clashed with boat crews and later fought on Okinawa and Ie Shima.

Both came home with physical and psychological wounds. Kottas' nightmares are worst before dawn, when many of the Pacific battles began.

"He was not the same person he was when he left," said his wife, Helen.

The men sat next to each other as friends, but Minamoto conceded he would still fight to the death again if necessary.

Kottas has a different view, saying, "We're here for a short time, so why kill each other?"

At the Garden of Peace, they chatted about life as soldiers, with Minamoto praising American reconnaissance before the battle.

"I think we saved a lot of lives on both sides," Kottas said.

As they left the garden, Minamoto smiled and said, "My close friend."

WILLIAM LUTHER/STAFF

Yoshiro Minamoto of Japan (left) and William Kottas of Nebraska met for the first time in Fredericksburg. Both fought at Okinawa.

Important dates in the Pacific Theater

1941

Dec. 7: Japan bombs U.S. military bases at Pearl Harbor. The United States, Great Britain and Canada declare war on Japan the following day.

1942

April 9: U.S. and Philippine troops surrender on Bataan Peninsula.

April 18: U.S. bombers hit Tokyo in Doolittle raid.

May 4-8: Battle of the Coral Sea halts attempted Japanese assault on Australian base at Port Moresby.

June 4-6: Allies defeat Japan in the Battle of Midway.

Aug. 7: U.S. Marines land on Guadalcanal.

1945

March 16: U.S. troops capture Iwo Jima.

June 21: Allies capture Okinawa.

Aug. 6, 9: Hiroshima, Nagasaki each hit with atomic bomb.

Aug. 14: Japan agrees to unconditional surrender.

Source: World Book Encyclopedia　EXPRESS-NEWS GRAPHIC

sigc@express-news.net

託された未来を繋いでいくこと

高取　千鶴

先日、靖國神社で行われた特攻隊戦没者慰霊祭に参列させていただいた。当日は雨であったが、かつて「靖國の桜になってまた会おう」と言った桜が満開で、いつもにも増して感慨深いものがあった。

慰霊祭に参列して最初に思ったことは、若い人がほとんどいないということであった。かくいう私もお声掛けいただかなければ、慰霊祭があることも知らず、参加することはなかっただろうし、何より以前の私は、戦争に関する様々なことをほとんど知らないまま生きてきた。そんな私に戦争について考える切っ掛けをくれたのは、12月と3月に公演された「MOTHER ～特攻の母鳥濱トメ物語～」という舞台（企画・制作／株式会社エアスタジオ・監督／藤森一朗）への出演だった。この物語は、知覧にある鳥濱トメさんが経営する富屋食堂での特攻隊員と彼らを取り巻く人々との実話をもとに描かれている。登場人物である光山少尉や穴澤少尉、大平少尉、荒木少尉、川崎少尉を始めとする実在した方々のエピソードが展開される。

この舞台で私は、特攻隊員の最後のお世話をし、見送ったなでしこ隊の女学生の役を頂いた。この作品に関わるに当たり、自分は無知過ぎると感じ、様々な資料に当たった。元々特攻隊に関しては、テレビで特集されていたのを観たことがあり、胸を打たれた記憶があった。しかし、以前の私の特攻隊への記憶に「自分と同じ年代の男の子達が片道分の燃料を積んでお国のために突入する悲しい作戦」という程度のものであった。今回訪れた靖國神社や遊就館、知覧、そして様々な文献を当たる中で、自分がいかに「戦争」について知っているようで知らなかったのかを思い知った。いや、どちらかと言えば、知ろうとしてこなかったという表現の方が正しいのかもしれない。私自身小さい頃から歴史が好きで関心が深かったが、何度か近代の「戦争」については、暗く忌まわしいイメージがあり、知ることを避けていたように思う。授業では戦争の上辺の部分しか教えられず、イメージだけが先行していき、そこにある「人々の想い」を知ることはなかった。しかし、今回自分で当たった資料、舞台を通じて感じたこと、人から伺ったお話などで一番感じたのは、「人々の想い」だった。ただ「お国のため」だと思っていたのは誤りで、その言葉の裏には、愛する家族や愛する人、自分が生まれ、沢山の想いが詰まった故郷の存在があること。それらを守るために自分たちが征かなければと思うほどに戦況が逼迫していたこと。笑顔で出撃した、その「笑顔」の裏には、自分の夢を諦めなければならなかったり、愛する人々との別れや様々な葛藤があったこと。そして、今私達が生きている「日本の未来」があることを願い、託してくれたこと。それらを知った時、自分達は「戦争」と無関係ではないということを実感した。どこかで「戦争」は昔のことで自分とは関係ないと思っていた。そしてそれは、今を生きる多くの若者に共通することではないだろうかとも思う。

それがどれだけ恥ずかしいことであるか。何故なら、今の私達は彼らが託してくださった「未来」を生きており、その「未来」を託して戦ってくださった方々の想いと、沢山の犠牲の上に生きているからである。しかし、それを知り、現代の私達を振り返ると、散って逝かれた特攻隊員の方々に胸を張れるような生き方ができていないことに気付き、申し訳ない気持ちで一杯になる。現代の若者の中に、「自分の国が好きだ」という人々は少ないように感じる。少なくとも私の周りはそうだ。自分の国よりも海外ばかりに目が行きがちで、そちらへの憧れが強い人が多い。自分も例外ではなかった。しかし、自分の国が好きという思いが湧かない理由の一つには、やはり「知らない」ということがあるように思う。私は今、沢山の想いを抱え、そしてそれを託して身を挺して戦ってくださった方々がいた日本が好きだ。日本に生まれて良かったと心から思う。偉そうなことは言えないけれど、右とか左とか、そういうことではなく、自分の生まれた国のことを知り、そこに生きた人々の想いを知り、そして自分の生まれた国を愛するということは、やはり大切なことではないかと思う。

今を生きる私達にできることは、特攻隊に限らず、沢山の人達が命を懸けて守ろうとしたこの国の「平和」を、「未来」を、「今」を繋いでいくことだと感じる。69年前彼らが願った「平和」が今の日本にはある。しかし、その「平和」を有り難く思えなくなったら、また戦争が起きるのではないかと危惧する。そうしないためにも、私達は考え続けなければならないと思う。そのために過去を知り、そこから学び、自分の考えを持たなければならないと思う。

「MOTHER」の稽古中に、一生忘れられない経験をさせていただいた。特攻隊というテーマに取り組む中で、気持ちの面でプラスになるものがあればとご心配を頂き、自衛隊の倉形寛教官が稽古場に、ある機体の破片を持ってきてくださった。それは陸軍の二式複座戦闘機「屠龍」の破片だった。この屠龍の破片の他の一部は、靖國神社の遊就館にも展示されている。この屠龍は本土空襲に来たB－29に機体ごと体当たりして撃墜したが、その際乗っていた2名の搭乗員も命を落とした。前席に乗っていたのが小林雄一軍曹（当時20歳）、後席に乗っていたのが鯉渕夏夫兵長（当時19歳）であった。彼らの乗っていた屠龍は高度７０００メートルから佐倉方面の田んぼに墜落し、遺体と機体が掘り起こされたのは、それから51年目のことであったと伺った。私達が見せていただいたのは、前席の操縦捍のすぐ横にあった翼の付け根に近い部分だった。つまり、体当たりするその瞬間まで、小林軍曹のすぐ側にあったものだ。その破片をタオルの上に置き、一人一人持たせていただいた。破片は思っていたよりもずっと軽かったが、ずしんと心に重く伝わるものがあり、涙が溢れて止まらなかった。小林軍曹の頭蓋骨は未だ見付からないという。彼らがどのような想いでB－29に体当たりしたのかと思うと胸が詰まる。あの時タオルの上から感じた感触と、心に感じた重みは忘れることができない。そして、決して忘れたくないと思う。

この時初めて「特攻隊」として編成された方々だけが特攻をした訳ではなく、特攻隊でなくても、状況に応じて体当たりをして、日本を守ろうとした方々の存在を知った。そしてこれを機に、それまで戦闘機の特攻ばかり調べていたが、特攻は戦闘機だけではないことも知った。桜花、回天、震洋、㋡、伏龍等様々な方法で、様々な特攻が行われていた。これだけ多くの方法で多くの方々が散ったのかと思うと、驚きを隠せない一方、悲しみの気持ちと感謝の気持ちが溢れた。

遊就館に行くと、必ず遺書を読むのだが、何故かその時々で胸に迫る遺書が変わる。先日、遊就館を訪れた時に読んだ、回天特攻隊の水知創一少尉（戦死後大尉・轟隊伊１６５潜・海軍14期飛行予備学生・早大・兵庫県出身・大正12年生）の遺書が何故か今に忘れることができない。

「（前略）私の母上への御願いは、朗らかに呑気に暮らして戴きたいことです。話は別ですが、御弁当はとてもおいしく、あれならもっと沢山作ってもらえば良かったと思いました。」

この結びの一行を読んだ時胸が締め付けられるような思いがした。この一行に、私は何故かあどけない一面を感じ、特攻隊員とはいっても少年であること、明日死ぬかもしれない身ながら家族を想う姿、そしてもうお母さんのご飯を食べられないという現実を感じ、その前に立ち尽くしてしまった。今でもこの遺書のことをふと思い出してしまう程、胸に引っ掛かっている。いつも感じることだが、どの隊員さんの遺書を読んでも、こんなに最後まで誰かのことばかり気に掛けられるだろうかと思うくらいに、みんな家族や愛する人達のことを気に掛けている。自分がその立場であったら、そうしていられるだろうか。自分と同じ年齢か、それより少し若い彼らの大人びた文面に、たまに現れる少年らしさを垣間見た時、いつも胸が詰まり、涙が溢れる。そしてどうしようもなく、ただ「有り難うございます」と伝えたくなる。また、彼らの犠牲の上に生きているのだということを実感する。

慰霊祭で、知覧高女なでしこ会からいらっしゃった森カヨ子さんと三宅むつ子さんにお会いすることができ、ご挨拶をさせていただいた。元気でいらっしゃるお姿を拝見して、とても嬉しく思った。慰霊祭では実際に特攻隊員だった方々、お仲間だった方々、そして、なでしこ隊のように、銃後を守りつつ支えた方々など、多くの方がいらっしゃった。慰霊祭に参列させて頂いたのだから当たり前ではあるが、映画や舞台で見てきた「現実」が目の前にあり、皆様がどういうお気持ちでいらっしゃるのかと思うと、言葉に詰まった。なでしこ隊だったお二人も実際に隊員さんのお世話をされ、見送った方々である。舞台で、なでしこ隊の役をやらせて頂く中で、ずっと「二度と合えない方々のお世話をして、笑顔で見送る。それも十六、七歳という、まだ子供らしい心も残る年頃なのに・・・」と考えると、どれだけ辛かっただろうと感じていた。辛いなどという言葉で表現してはいけないのではと思う程に。その時は兵隊の方々だけでなく、誰もが戦っていたのだと改めて感じた。そして、それが「戦争」なのだということも。

この舞台をきっかけに、調べて、考えて、演じさせて頂いた中で、私が感じた辛さ、悲しさは、当時の方々にはとても及ばないし、理解できたことも恐らく、ほんの一部なのだと思う。し

知覧・富屋食堂（資料館）

特攻の母鳥濱トメ物語の舞台

かし、芝居を通して、様々なことを知ることができたこと、考えるきっかけを頂いたこと、貴重な体験をさせて頂いたことに心から感謝している。私はまだ、「戦争」のこと、「特攻」のこと、そして自分が生きる「日本」のことを知り始めたばかり、入口に立ったばかりなのだと思う。だからこそ、これからも知る努力をし、考え続けていきたいと思うし、折に触れて靖國神社にも足を運びたいと思う。今自分が生きている世界は、特攻隊員を始め、多くの方々が託してくださった「未来」であるということを忘れずに感謝し、これからの日本を支えていける若者になれるよう、しっかり生きていきたいと思う。

知覧・三角兵舎（復原）

◇

高取千鶴（たかとりちづる）
役者／なでしこ隊・前田笙子役
神奈川県出身、22歳、フリーで活動中。

台湾の特攻隊資料館

会員　原　知崇

台湾に興味を持つ方が増え、台湾の陸海軍関係史跡も知られるようになった中、現地の特別攻撃隊の資料館を訪れたので、報告させていただきます。

〈宜蘭〉 台湾北東部に位置し、台北から鉄路1時間半ほどの町、宜蘭（ぎらん）。日本時代から農業に力を入れた場所で、今も駅周辺を離れると、水田地帯が広がっている。日本の田園風景を彷彿とさせるが、この町はかつて菊水作戦において、多くの特攻機を送り出した町である。

宜蘭飛行場の跡は、航空写真で調べていただくと分かりやすい。現在は建物も多くなり、滑走路を始め、その施設の全貌を実地に確認するのは、年々困難になってきているものの、特に掩体壕は周辺に良い保存状態で幾つも現存しており、見学することもできる。その中には「員山機堡」という名称で保存され、特攻隊についての展示館が付属しているものもある。

機堡とは掩体壕の意味であり、この員山機堡は、南飛行場と北飛行場の中間にあった掩体壕であったようだ。宜蘭駅からはタクシーで30分程度、知名度は高くないので、事前に地図等を用意しておくとよい。上部を草で覆われたコンクリート製の掩体壕の前に、資料館が建設され、竹製の飛行機が置いてある。これは当時、米軍の大規模空襲に際して、飛行機のダミーを設置して誤爆させたものを再現したということだが、台湾東部では今でも大東亜戦争中の防空壕が散見され、基地を支えた町への空襲の激しさも偲ばれる。資料館に入ると、専属スタッフの方が付いて案内してくれた。日本の台湾統治の開始、飛行場建設、大東亜戦争について、そして特別攻撃隊についての説明が淡々と事実を並べる形で説明されているが、残念ながら日本語には全く対応しておらず、主に地元青少年に向けて特別攻撃隊についての歴史を語り継ぐ場になっているようである。

しかし、地図や大きな写真パネルを多用し、若い人にも理解しやすい展示である。昭和20年4月11日からの特別攻撃隊出撃については、全ての出撃の

日付け、部隊名、機種名、機数が壁面に日を追って示されており、本土を離れたこの地から、350海里離れた沖縄へ続々と飛び立って行った若き陸鷲海鷲の姿を思い、圧倒される。

なお、宜蘭設置記念館という、日本統治時代に地方長官が官舎としていた建物が、現在は当該地の歴史資料館となっているが、ここにも写真入りで特別攻撃隊の基地があった歴史が示されている。

〈花蓮〉 花蓮（かれん）は、台湾東部に位置し、宜蘭から更に鉄路で1時間半程度のところにある都市。かつては内地からの入植者が多く、港湾、鉄道の要衝として栄えた賑やかな街である。この地にも花蓮港南飛行場跡の掩体壕が公園の中に保存されているが、市内からは遠い。しかし、市内に「松園別館」という、規則正しいアーチでベランダを支えた戦前の建築がある。台湾歩兵第二聯隊の現存する兵舎とも共通するコロニアルな雰囲気である。高台にあり、大きな松の木越しに見下ろす港の景色が清々しい。この建物は、1943年に建てられた将校集会所であったということだが、現地では、特別攻撃隊の隊員達が出撃前夜を過ごした建物であると紹介されている。

現在では、ギャラリーやカフェとして地元の方に親しまれているこの建物の脇に、堅牢な防空壕が保存されている。特に説明はないが、細い階段を下りて入ってみると、内部が特別攻撃隊についての小さな資料室になっている。資料性は高くはないが、大西瀧治郎中将の写真と「神風という言葉の意味は何か」を始まりに、特別攻撃隊の説明があり、台湾にも台中、台南、新竹、宜蘭等に特別攻撃隊の基地があったこと、桜花など兵器の説明と、ここもまた、政治的な意図抜きで事実のみを、若い観覧者が興味を惹くような見出しと端的な説明で、写真を用いて説明してあるのが印象的であった。松園別館付属の売店では、特別攻撃隊の文字が入った土産物が幾種類か並んでいる。

最近日本では、台湾は親日的とよく言われるようになったが、私は、一括りには言えないと思っている。日本軍を由来とする慰霊施設や史蹟を、並々ならぬ熱意で維持されている現地の方々もあるし、一方ではまた、それをよしとしない方々もあるようだ。しかし、多くの人は、それらに対してそれほど強い興味を持っているわけではない。そういう中にあって、特別攻撃隊についての資料館が台湾にあり、現地の方々がその事実を後代に伝えるべく運営されていることに、深い感銘を受けた。

宜蘭の掩体壕

花蓮の防空壕入口

平成25年度事業報告

一　慰霊事業

1　第34回特攻隊合同慰霊祭

平成25年3月30日靖國神社において斎行した。参列者は、遺族20名を始め来賓、戦友、一般会員等合計197名が参列して、英霊奉慰の誠を捧げた。昨年より26名の減少であったが、問題もなく整斉と実施された。

慰霊祭終了後、靖國会館において、当顕彰会の状況説明及び懇親会を実施した。

2　第62回特攻平和観音年次法要

平成25年9月23日の秋分の日に、世田谷山観音寺において、同寺と地元駒繋神社との神仏習合による年次法要が営まれた。当顕彰会は、全面的な

協力を行った。当顕彰会関係の参列者は、来賓29名、遺族28名、会員等172名、総数229名であった。当日一般参加者が28名増加したため、最終的に昨年より11名の増加となった。

3　各地慰霊祭への参列等

ア　代表者派遣

（実施月日）	（慰霊祭等名）	（場　所）	（参列者）
4月4日	豫科練雄飛会慰霊祭	靖國神社	衣笠専務理事
4月6日	都城特攻慰霊祭	宮崎県都城市	倉形評議員
4月6日	鹿屋特攻隊慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	小倉理事
4月7日	徳之島慰霊祭	鹿児島県大島郡	及川評議員
4月13日	萬世特攻隊慰霊祭	鹿児島県南さつま市	新垣評議員
4月16日	出水特攻慰霊祭	鹿児島県出水市	藤田副理事長
4月22日	靖國神社春季例大祭	靖國神社	衣笠専務理事
5月3日	知覧特攻隊慰霊祭	鹿児島県南九州市	水町理事
5月12日	特攻殉国の碑慰霊祭	長崎県川棚町	衣笠専務理事
5月25日	海原会慰霊祭	茨城県稲敷郡	杉山理事長
5月26日	義烈空挺隊慰霊祭	沖縄県糸満市摩文仁	金子事務局次長
7月7日	大東亜慰霊協慰霊祭	靖國神社	杉山理事長
9月12日	市ヶ谷台慰霊祭	防衛省市ヶ谷駐屯地	水町理事
10月15日	串良基地戦没者慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	飯田評議員
10月18日	靖國神社秋季例大祭	靖國神社	杉山理事長
10月18日	千鳥ヶ淵墓苑秋季慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑	杉山理事長
11月9日	回天大津島慰霊祭	山口県周南市大津島	衣笠専務理事
11月13日	若潮会慰霊祭	靖國神社	飯田評議員

イ　供花送達等

（実施月日）	（慰霊祭等名）	（場　所）
4月3日	宮崎特攻基地慰霊祭	宮崎県宮崎市
4月7日	海上特攻第二艦隊追悼式	鹿児島県枕崎市
5月7日	黒島特攻平和祈年祭	鹿児島県三島村
9月30日	明野忠魂塔慰霊祭	陸上自衛隊明野駐屯地
10月25日	神風特攻慰霊祭	フィリピン・マバラカット市

ウ「特攻勇士之像」奉納除幕式

（実施月日）（奉納場所）　（参　列　者）

10月31日　埼玉縣護國神社　杉山理事長以下9名

二　「特攻勇士之像」建立事業

本年度の「特攻勇士之像」建立事業は、前記埼玉縣護國神社へ一体を建立奉納した。今回の建立奉納で、世田谷山観音寺への建立奉納分を含めて総計13体となった。

三　その他の事業

1　広報事業として機関誌・会報『特攻』第94号～第97号を発行し、会員、協力団体及び希望者等に頒布した。会報は、ホームページでの閲覧、印刷出力が可能である。また、情報公開上の観点から、事業計画及び財務関係資料等を公開している。

2　出版事業では、平成20年度に刊行した『特別攻撃隊全史』及び『特別攻撃隊全史　追補版』並びにCD『あゝ特攻』等を引き続き頒布した。

四　会員の動向

平成25年度の新規入会者は60名であり、死去等による退会者が275名であったため、会員数は差し引き215名の減となり、平成25年度末の会員数は、2102名となった。

今年度も昨年に引き続き旧軍関係者の死去・高齢化による退会が多かった。世代交代の末期に当たり、若手の会員募集を始め、生存者からの更なる資料収集、顕彰会保有資料の整理・活用、若手会員への世代交代のための諸施策等に留意しているところである。特に若手の会員募集は、顕彰会の活動の根源ともなるべきものであり、今後特に力を入れる所存である。

平成２５年度正味財産増減計算書

平成２５年１月１日から平成２５年１２月３１日まで

(単位：円)

科　　目	２５年度決算	前年度決算	増　減	備　　考
Ⅰ 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
基本財産運用益	9,259,776	8,369,400	890,376	
特定資産運用益	266,653	154,373	112,280	
受取会費	5,046,000	5,534,000	△ 488,000	
慰霊事業収益	2,563,000	2,988,000	△ 425,000	
出版事業収益	143,200	128,100	15,100	
受取寄付金	2,975,000	2,748,000	227,000	
雑収益	108,000	40,600	67,400	
経常収益計	20,361,629	19,962,473	399,156	
(2) 経常費用				
慰霊事業負担金	574,553	968,095	△ 393,542	
像制作負担金	599,750	1,589,260	△ 989,510	建立１箇所のみ
発送等委託費	1,574,206	1,424,086	150,120	
支払助成金	1,880,440	1,971,720	△ 91,280	
役員報酬	400,000	320,000	80,000	
給料手当	3,941,540	3,444,580	496,960	
退職給付費用	0	0	0	
福利厚生費	540,202	483,064	57,138	
旅費交通費	2,156,780	2,010,270	146,510	
通信運搬費	415,771	453,676	△ 37,905	
減価償却費	206,461	183,648	22,813	
消耗品雑費	1,178,022	684,202	493,820	
印刷製本費	2,000,428	2,324,322	△ 323,894	
会議費	94,410	138,416	△ 44,006	
光熱水料費	96,745	77,652	19,093	
賃借料	1,640,100	1,417,060	223,040	
諸謝金	101,920	271,000	△ 169,080	
雑支出	0	701,638	△ 701,638	
退職資産繰入費用	155,000	192,333	△ 37,333	
経常費用計	17,556,328	18,655,022	△ 1,098,694	
評価損益等調整前経常増減額	2,805,301	1,307,451	1,497,850	
基本財産評価損益等	1,481,087	4,330,281	△ 2,849,194	
特定財産評価損益等	0	0	0	
当期経常増減額	4,286,388	5,637,732	△ 1,351,344	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
減価償却引当資産増	0	0	0	
退職資産繰入費用	0	0	0	
経常外収益計	0	0	0	
(2) 経常外費用				
貯蔵品資産償却	0	83,982	△ 83,982	
指定正味財産への振替	3,600,000	0	3,600,000	特攻像特定資産
経常外費用計	3,600,000	83,982	3,516,018	
当期経常外増減額	△ 3,600,000	△ 83,982	△ 3,516,018	
当期一般正味財産増減額	686,388	5,553,750	△ 4,867,362	
一般正味財産期首残高	16,139,063	10,585,313	5,553,750	
一般正味財産期末残高	16,825,451	16,139,063	686,388	
Ⅱ 指定正味財産増減の部				
一般正味財産への振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	3,600,000	0	3,600,000	
一般正味財産期首残高	274,400,000	274,400,000	0	
一般正味財産期末残高	278,000,000	274,400,000	3,600,000	
Ⅲ 正味財産期末残高	294,825,451	290,539,063	4,286,388	

平成26年度第1回理事会及び定時評議員会実施報告等

事務局長　羽渕　徹也

一　平成26年度第1回理事会の実施

平成26年2月25日（火）、靖國神社遊就館内の当慰霊顕彰会事務室において、平成25年度事業報告及び決算報告並びに任期満了理事の再任、新任理事及び評議員の新たな役員人事等について審議され、全て原案どおり了承されて、評議員会に付議することが決議された。

また、昨年から月1回程度会同を重ねている全体委員会の内容に関し、衣笠専務理事から報告が行われた。

二　平成26年度定時評議員会の実施

昨年まで理事会と同日に実施されていた評議員会が、2週間後の平成26年3月5日（水）、靖國会館九段の間において実施され、平成25年度事業報告及び決算報告、並びに任期満了理事の再任、新任理事及び評議員の就任を含む役員等人事選任決議案について審議され、全て原案どおり承認された。

また、昨年から会同を重ねている全体委員会の内容に関し、衣笠専務理事から説明が行われた。

①　年度報告事項

ア　平成25年度事業報告（別添資料）

イ　平成25年度正味財産増減計算書

（別添資料）

②　選任後の役員等

ア　選任理事8名（定員6～10名）

理事長　杉山　蕃

副理事長　藤田　幸生

専務理事　衣笠　陽雄

執行理事　小倉　利之

同　水町　博勝

理事　臼田　智子

同　笹　幸枝

（新任理事）

羽渕　徹也

イ　監事2名（定員1～2名）

監事　伊集院雅英

同　阿部　軍喜

ウ　評議員16名（定員12～18名）

秋山　政隆　穴山　正司

飯田　正能　石井　光政

石井　千春　及川　昌彦

大穂　園井　太田　兼照

倉形　桃代　高嶋　博視

中江　仁　新垣　敬輝

根木　東洋　早川　雅彦

（新任評議員）

深山　明敏　長瀬　彰孝

三　第35回特攻隊合同慰霊祭の斎行について

当慰霊顕彰会主催による今年度の第35回特攻隊合同慰霊祭は、平成26年3月30日（日）、靖國神社において、厳粛盛大に斎行された。

靖國神社の桜は、3月25日（火）、境内の標準木により開花宣言が行われてから6日目、丁度満開の時期を迎えたが、当日は生憎の雨天となった。

会員の高齢化等により年々参列者が減少している上に、雨天のため、更に減少することが心配されましたが、本年も昨年と同様200名近い多数の皆様のご参列を頂き、心より感謝申し上げます。詳細については、本会報『特攻』第100号に掲載されていますので、省略させていただきます。

四　「特攻バッジ」の頒布について

本年2月、会報『特攻』第99号で、頒布についてご案内しましたが、予想以上に評判が良く、追加製造を依頼したような状況で、一部の方にご迷惑をお掛けしましたことをお詫びいたします。

なお、今後の追加注文やバッジの不具合等に関しましては、当事務局までご一報下さるようお願いいたします。

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成26年1月1日～3月31日）

（単位千円）

一〇〇〇　多田野　弘

三〇　山根　秋男　二〇　森山　正義

一〇　中川　聖　一〇　中村光太郎

一〇　椿　孝則　一〇　松井　敬子

一〇　市川　雄一　一〇　中曽根慶蔵

一〇　松本　司　一〇　小野　蘭二

一〇　大穂　利武　一〇　石橋　一歌

一〇　折下　寛法　一〇　原島　淳子

一〇　中島　尚文　一〇　西　正昭

一〇　久保　巍　一〇　永田　利夫

一〇　中川　香織　一〇　阿万　卓也

一〇　服部　武志　一〇　菅原　道之

一〇　西山　和宏　一〇　杉本　豊久

八　中江　仁　七　田湯　聖禮

七　田茂　タキ　七　島田　幸正

七　高山　友二　七　川井　孝輔

七　井上　茂樹　七　井川　嘉江

七　堀江　正夫　七　大澤　俊夫

七　横瀬　富一　七　大井　路雄

七　中曽根康弘　七　吉田　文尭

七（公財）千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕

七　萩野　茂雄　七　武谷　孝生

七　上村　貞蔵　七　尼子　和世

七　西本千代子　七　松田陽一郎

七　塚田　征二　七　河野　茂義

六　駒場剛太郎
六　大和　誠
六　高田　耕治
六　水野　伸子
六　加藤　千佳
六　北村菜穂子
六　小松　雅也
六　水内　三郎
五　川岸　義視
五　長沼　秀直
五　須田　里吉
五　小田原健児
五　臼井日出男
五　木下　矩武
五　岡崎　幸平
五　中林　惠子
五　藤井　日正
四　小松　嶺生
四　予科練雄飛会
四　柿崎　裕治
三　高橋　房之
三　遠藤　和子
三　澤田江里子
三　湯澤　一枝
三　山本　年男
三　堀川　淳一
三　加藤　拓
三　新　忠信
二　野俣　明
二　畝田謹次郎
六　千葉　孝
六　埼玉偕行会
六　宇都　隆史
六　櫻井　光夫
六　藤井　常男
六　丸　俊郎
六　十川重次郎
六　早田　亮彦
五　菊池　稔康
五　臼田　智子
五　後藤　昭一
五　小倉　利之
五　板垣　正
五　田辺さだ子
五　小林　郁雄
五　山田　治男
四　谷垣　尚
四　原　武廣
四　三春　仁
四　太田　賢照
三　作左部　貢
三　常井　功子
三　池田　守
三　飯田　正能
三　北森　茂樹
三　島崎　宗勝
三　井上　勝蔵
二　廣田　正
二　信平セイ子
二　阿部　敏行
二　今井　敏夫
二　駒井　満男
二　海老沼静香
二　峰尾　栄
二　丸橋　安夫
二　河島　慶明
二　布施木　昭
二　井出野正和
二　土橋　猛
二　松本栄三郎
二　植田　和男
二　小川昭二郎
二　成富　暢三
二　杉原　清之
二　肥田木多恵子
二　塚原　正
二　光安　良一
二　梅田　俊幸
二　広瀬　勉
二　松本　和彦
二　茨木　治人
二　出雲　博
二　山岸　茂
二　武居　房子
二　田中　清
二　蓬生　錬二
二　小宮山玄二
二　谷　功
二　新井　郁男
二　三宅　好美
二　小林　正昭
二　横塚　武
二　荒木　精一
二　峯尾　栄
二　山口　武夫
二　奥山　雄三
二　石川　宰敬
二　石井　敏子
二　飯田　雍子
二　今井五十二
二　茂木　昌三
二　岡本　久吉
二　北村　昭正
二　小田村四郎
二　小堀桂一郎
二　井上　孝之
二　坂本　康子
二　西村　米子
二　大川　吉昭
二　藤川　忠重
二　河本　憲恵
二　樽井　弘和
二　城ヶ端　専
二　花村　龍男
二　炭竈　三郎
二　大井　重平
二　平田　重夫
二　水野　清
二　後藤　文夫
二　下野ふさ子
二　小泉　朋美
二　藤田　通寛
二　新田　和子
二　布廣　鉄夫
二　川人　明美
二　重松　源吉
二　徳田　裕
二　高橋　雄二
二　里崎　雪
二　樺島　節子
二　福田　充
一　川本　修二
一　佐藤　孝一
一　関根　賢治
一　栗田　貞子
一　小島　啓三
一　伴野　富夫
一　大橋　省三
一　鎌谷　鐵吾
一　武藤　一彦
一　藤井　宏
一　根木　東洋
一　柴　芳文
一　鷹野　太輔
一　森本　益夫
一　杉山　徹宗
一　西澤　哲夫
一　中島　實
一　星野　良助
一　西村　久宣
二　野上　五夫
二　吉田　治正
二　丸原　巧
二　原田　義治
二　村越　正清
二　濱田　秀逸
二　矢野　孝男
二　佐藤　義信
二　荒木　孝
二　市来　徹夫
一　藤野　洋政
一　中川　望
一　齋藤　忠信
一　菊地　昭夫
一　上原　富次
一　林　美子
一　箕輪　敏
一　佐伯トシ子
一　田鍋　守
一　大手　良之
一　梅田　春雄
一　豊岡　久
一　長谷川知幸
一　野口　剛
一　多田　光利
一　齊藤　誠
一　斎藤　正夫
一　中川　透
一　中村　博志
一　加藤　史明
一　金子　幸生
一　石本登志夫
一　星埜　清滋
一　上畑　幸晴
一　田中　清
一　上嶋　正敏
一　森ノ内敏巳
一　河内　昭賢
一　三浦　玄洋
一　笠井　智一
一　谷川　義雄
一　津覇　実雄

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成26年1月1日～3月31日）

千葉県　西尾　秀俊
東京都　山口　貞男　松本　謙治
太田　賢照　太田　恵淳
高田麻理子　梅田　優邦
岡田　雅彦　寺澤　廣一
鮫島　明子　宮脇　康之
浅野　敬子　渡辺　由佳
堺　敏明　梅澤　義憲
金岡　弘大　久保　貴義
小長谷丈晴
関本　宗市　吹野　昇治
神奈川県
内山　正義
王畑　幸一
岡本　貴鮮　深田　裕子
小宮　崇一
桝田　恭展
三重県
大阪府
豊嶋美由紀
岡山県　生峯　和代
山口県　原田　茂
福岡県　山崎　悟　柴田沙矢香

佐賀県　野田久美栄

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

北海道　朝日　明
岩手県　辻村　文隆（26・1・17）
山形県　斎藤　忠治
群馬県　佐藤　博
千葉県　歌田　實
東京都　林　國久　平井　脩博
山口　二郎（25・12・7）
神奈川県　宮下　勝見　斉藤　正之
結城　浩（25・11）
大串甲子男（25・11）
二階堂悌二郎（25・12・1）
古明地正雄（25・12・13）
愛知県　大場　敏一　山本　一雄
奈良県　向川　富男
広島県　秋山　武志
徳島県　佐藤　高明
福岡県　自在丸庫一
佐賀県　西山　和宏（25・9・23）
長崎県　山口　博純（25・11・2）
熊本県　杉本　豊久（26・1・31）

会報『特攻』第99号正誤表

次のとおり誤りがありましたので訂正し、謹んでお詫び申し上げます。

（訂正箇所）

26頁4段
9行目　誤　四　正　㊃
18行目・22行目誤　レ　正　㊀
27頁2段
2行目　誤　レ　正　㊀
3行目　誤　四　正　㊃
27頁3段
18行目・29行目誤　レ　正　㊀
27頁4段
17行目・28行目誤　レ　正　㊀
28頁1段
5行目・8行目誤　レ　正　㊀
26行目　誤　駆逐艦　正　削除
26行目　誤　体当たりを　正　体当たり
29行目　誤　レ　正　㊀
28頁2段
12行目・23行目・24行目　誤　レ　正　㊀
36頁1段
5行目　誤　可能　正　不可能

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革
昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長　山本　卓眞　氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長　杉山蕃氏

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4595

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4595